21
489

始

新聞記者 山崎晴治著

上毛山水志

21-489

上毛新聞記者　山崎晴治著

上毛山水志

上毛新聞社出版部發行

大正
5. 9.18
内交

上毛新聞社出版部發行

上毛山水志

山崎暢治著

大正 5.9.18 内交

自序

一、饒舌を憎み孤獨を愛し、ひたすら自然美に憬れて、日もすがら山野を逍遙したる時代の余は、醇潔なる心を持しゐたり。ウオルズオルス詩集一卷を懷にして、湖畔に立つを喜びたる少年の日の、如何になつかしくもあるかな。早や少年の春は過ぎ、醇潔の心は汚濁に染みたり。筆執ることには熱したれ、美しかりし信念も今は空蟬にひとしきものを、再び自然を描かんとする時に、胸に痛ましき哀愁あり、あゝ此の哀愁を誰にか語らん。

一、風景を主とし、探勝者の便を慮りたる山水の記錄なり、未だ斯くの如き形式の刊行物なく、以て範となすべきものを缺けり、本書の甚だ体をなさゞる固よりなり。處女作として更に周到の用意なからざるべかりしを、劇務の寸暇を偷み而も匆々の間に成りしことなれば、材料の貧弱、文辭の不熟、意に充たざるもの擧ぐれば際まりなし。非ず、已が淺學短才を、昨日も悲しみ今日も嘆くなり。

一、特に湖沼を愛するもの多きを聞かず、或は未だ一般にその幽寂の趣を解せられざる故ならんか。余は山岳を顧みず溪流を棄つるとも、湖沼を訪はずして已むべからず、「湖沼の趣味」一篇は寧ろ余自身のためと云ふべきなり。

一、小著編述に際し感銘して念頭を離れざるもの一つあり、否な二つあり。是は上毛新聞主筆橋本不城氏が恰も己が事の如くに多大の援助を賜はりたることなり、彼は富岡中學校長新井儀藏、桐生高等女學校教諭原澤豐作、藤岡中學校教諭吉田盛雄諸氏が各山岳の高山植物に就き示教を惜まざりしことなり。茲に特に記して感謝の意を表す。

一、貴きものは友愛の情なり。小著の成る、先輩友人諸氏の助力に俟つところ頗る大なるものあり、余は夢寐の間も之を忘れざるべし。

大正五年八月二十九日　上毛新聞社編輯局にて

著　者

目　次

第一篇　緒　論　一
第二篇　山　岳　篇　一二
第一章　金　精　峠　一二
第二章　白　根　山（日光）　一四
總説……登山路……高山植物……
第三章　武　尊　山　二五
第四章　迦　葉　山　二七
第五章　赤　城　山　二八
總説……登山路……高山植物……

第六章　金　山　四二
第七章　榛名山　四三
總說……登山路……高山植物……
第八章　角落火山　六二
總說……登山路……
第九章　淺間山　六五
總說……登山路……高山植物……噴火史……
第十章　地藏峠　八二
第十一章　碓氷峠　八五
第十二章　妙義山　八七
總說……登山路……
第十三章　荒船山　九六

第十四章　四阿山　九八
第十五章　万座山　一〇〇
第十六章　白根山（草津）　一〇二
總說……登山路……高山植物……
第十七章　御荷鉾山　一〇九

第三篇　溪流篇　一一〇

第一章　利根川　一一〇
總說……大河の趣……前橋附近……澁川近傍……
綾戸隧道……山中の大河……赤谷川……別天地……
藤原大森林……須田川……水源……
第二章　利根川水源　一二五

傳說…最初の探險…湯の小屋溫泉…俄作りの湯槽…
天井の大蛇…水源なるぞ…文珠菩薩……尾瀨沼……

第三章　吾妻川　一四一
總說…岩井洞…四万川…岩櫃山…關東の耶馬溪…

第四章　片品川　一四九
總說……赤城根橋……吹割の瀧……圓覺の瀧……

第五章　碓氷川　一五八
總說……峠の下へ……

第六章　鏑川　一六一
總說……富岡以西……黒瀧山……

第七章　神流川　一六五
總說……八汐鑛泉……鬼石の溪谷……三波石……

第八章　渡良瀨川　一七〇
總說……高津戸……溪谷の奥……桐生川……

第四篇　湖沼篇　一七六

第一章　大沼及小沼　一七六
總說……風景……

第二章　榛名湖　一八〇
總說……風景……

第三章　菅沼丸沼及大尻沼　一八五
總說……風景……

第四章　尾瀨沼　一九五
總說……風景……

第五章　野反池及森沼……一九九

　總說……風景……

第六章　邑樂の沼……二〇二

　總說……風景……

第五篇　湖沼の趣味

（第五篇）……二〇七

第一章　湖沼の寬術……二〇七

第二章　大森林と沼……二一三

第三章　雨と霧……二一八

第四章　大沼の螢……二二三

第五章　水荘記……二三四

第六章　湖沼の傳說……二四〇

　龍のお姿……犧牲の美少女……腰元蟹……立田の返討……お辻の方……鱗三枚……

圖版目次

第一圖　菅沼より見たる日光白根

第二圖　赤城山の全景

第三圖　榛名山二ッ嶽

第四圖　輕井澤より見たる淺間山

第五圖　妙義山第一石門

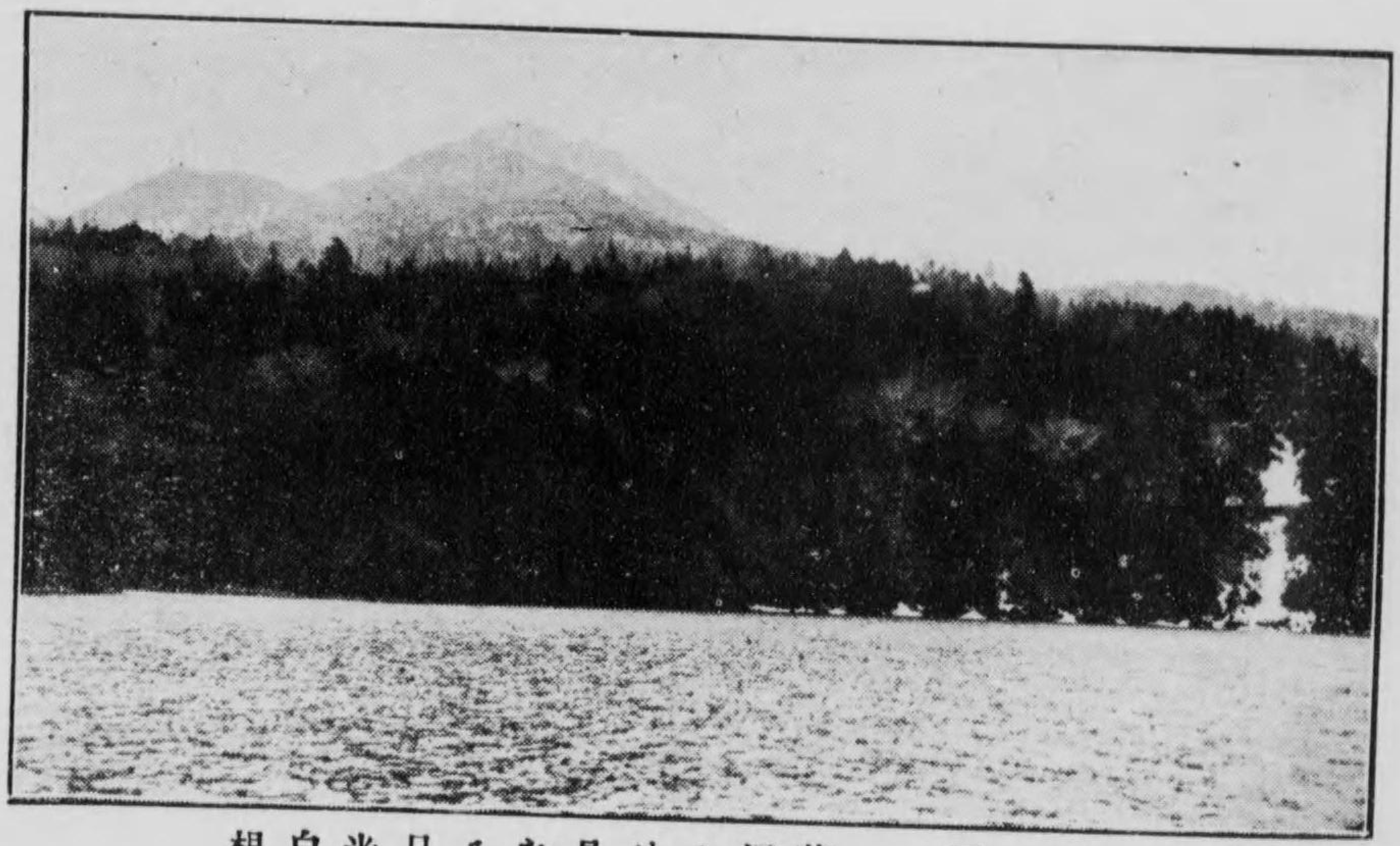
第六圖　草津白根の湯釜水釜

第七圖　利根川岩本簗

第八圖　赤谷川黒岩
第九圖　片品川赤城根橋
第十圖　吹割瀧
第十一圖　渡良瀬川高津戸橋
第十二圖　大沼
第十三圖　小沼の遠望
第十四圖　榛名湖と榛名富士
第十五圖　菅沼
第十六圖　丸沼と沼合川
第十七圖　大尻沼
第十八圖　躑躅岡
第十九圖　菅沼の寫生

第二十圖　同
第二十一圖　同
第二十二圖　同

目次終



第一圖　菅沼より見たる日光白根

上毛山水志

上毛新聞記者　山崎晴治著

第一篇　緒論

古來上毛の國は山水明媚の地を以て世に稱せられてゐるが、これは決して吾人を欺むかぬ事實である。妙義の岩、碓氷の紅葉、吾妻の溪流、追貝の瀧それのみでも天下の絶勝と謳はれ、關東隨一と誇つてゐる。單に一塊の山、一流の水を擧ぐるは愚かな業、國の全体が一の樂土遊園に造られたるが如き觀ありて、車を右するも左するも、歩を上すも下すも、隨所に秀麗佳絶の景趣を發見するに苦しまぬは、吾人

の大に驚嘆する所である。

奇景を以て鳴るは妙義山三波石吹割の瀧である。雄大を以て稱せらるゝは淺間山赤城山利根川である。秀麗を以て愛せらるゝは榛名山榛名湖である。幽邃を以て誇るは大沼菅沼である。若夫れ溪流の凄に至つては川あれば必ず之を探るべく、紅葉の艷に至つては山あれば必ず之を賞し得るのである。而も未だ世人の耳に熟せざる勝地にして四邊に隱るゝもの指を屈して數ふるは、一度は驚き一度は喜ばざるを得ぬ。おしなべて之を言へば日本アルプスの如き高峻難險にして復雜多様を極め、神聖崇高の山岳美は、或は求め得べからざる所であらうが、その輪廓は典雅その色彩は豐麗、溫乎として甚だ親しみ易きがために、此處に大なる遊樂境を現出したのである。

活火山あり休火山あり死火山あり、是等火山の存在は總て溫泉の湧出を豐富ならしめてゐる、溫泉は山水美を紹介する緣となり之が探勝に尠からぬ利便を與へた。

この國各所に名湯靈泉湧いて盡きざるがために、さなきだに樂園的の山水は遂に絶好の遊覽地となるに至つた。

國の四分の三を山岳の起伏するに任せ、僅に東南の一隅を關東平原に托するのが上毛の地勢である。玆に山岳連亘の脈を辿るなれば、那須火山系に屬する日光火山群は國の東西隅より來り、下野との境界を劃して多數の峻峰高岳を起し、又その西に武尊山塊を擡げ赤城山の雄峯を作り、遂に金山の丘陵を生む。淺間火山群は榛名山に起り、西に延びて鼻曲山淺間山荒船山等を噴出し以て信州と界す。越後山系に屬する清水山塊は北境に連立して、裏日本表日本の分水嶺となる。同じ山系の白根火山群は淺間山の北方に陣して是と其の猛威を競ふ。而して西南の一隅に蟠屈するは關東山系に屬する秩父山塊の北端である。各山塊に屬する一千五百米突以上の高峯及び特に著名なるものを列記するなれば

一　日光火山群

赤安山(二千五十米)　黒岩山(二千百六十二米)　鬼怒沼山(二千百四十米)　物見山(二千百十七米)　燕巣山(二千二百十二米)　四郎嶽(二千百五十六米)　檜高山(一千九百三十二米)　皿伏山(一千九百十六米)　荷鞍山(二千二十四米)　溫泉嶽(二千三百三十三米)　金精山(二千二百四十二米)　白根山(二千五百七十七米)　錫ヶ嶽(二千三百八十八米)　宿堂坊山(一千九百六十八米)　皇海山(二千百四十三米)　瑩塚山(一千八百八十四米)　唐澤山(一千七百八十七米)　赤澤山(一千五百三十九米)　六軒山(一千七百二十三米)　笠ヶ嶽(二千二百四十六米)　三ヶ峯(二千三十二米)　沼上山(一千五百四十米)景鶴山(二千一米)　大白澤山(一千九百四十二米)　ス丶ヶ峰(一千九百五十九米)　日崎山(一千八百十六米)　至佛山(二千二百二十八米)　笠ヶ嶽(二千五十七米)　大行山(一千七百七十一米)　四山(一千八百九十八米)　矢種山(一千七百十二米)　武尊山(二千百五十六米)　迦葉山(一千三百二十二米)　三峰山(一千百二十二米)　赤城山(一千八百二十八米)

袈裟丸山(一千八百七十八米)　二子山(一千五百五十六米)　金山(二百二十二米)

二　淺間火山群

榛名山(一千四百四十八米)　小野子山(一千二百八米)　小持山(一千二百九十六米)　鼻曲山(一千三百五十四米)　淺間山(二千四百九十三米)　高峰(二千百五米)　籠ノ塔山(二千二百二十八米)　碓氷嶺(九百五十六米)　妙義山(一千八十一米)　荒船山(一千四百二十二米)　黒瀧山(八百七十米)　湯の丸山(二千百五十米)　稜敷山(一千九百十五米)　鍋蓋山(一千八百二十八米)　小在池山(一千九百八十米)

三　清水山塊

白澤山(一千九百五十二米)　水長澤山(一千六百九十五米)　平嶽(二千百三十九米)劍ヶ峯(一千九百九十七米)　丹後山(一千八百八米)　越後澤山(一千八百六十米)　小穂口山(一千五百二十六米)　下津川山(一千九百二十七米)　小澤嶽(一千九百四十四米)　藺澤山(一千七百四十二米)　及物崎山(一千六百七米)　卷機山

（一千九百六十二米） 米子頭山（一千七百九十六米） 柄澤山（一千九百九十米）朝日岳（一千八百十九米） 笠ヶ岳（一千九百四十五米） 上川小屋山（一千六百七十四米） 茂倉岳（一千九百七十七米） 谷川富士（一千九百七十四米） 谷川岳（一千九百六十三米） 万太郎山（一千九百五十四米） 阿能川岳（一千六百十一米）仙ノ倉山（二千二十六米） 太源太山（一千七百六十四米） 三國山（一千六百三十六米） 稲包山（一千五百九十七米） 木戸山（一千七百三十二米） 相ノ倉山（一千五百六十七米） 上間山（二千三十三米） 白砂山（二千百三十九米） 八十三山（二千三十四米） 八間山（一千九百三十四米） 松岩山（一千五百十三米）

四 白根火山群

大高山（二千七十九米） 赤石山（二千百八米）白根山（二千百二米）本白根山（二千百七十六米） 万座山（一千九百九十四米） 黒湯山（二千七米） 御飯嶽（二千六百二米） 土鍋山（一千九百九十九米） 浦倉山（二千九十米） 四阿山（二千三百三十二米） 茨木山（一千六百十六米） 的岩山（一千七百四十三米）

五 秩父山塊

諏訪山（一千五百四十九米） 三國山（一千八百二十八米） 天丸山（一千五百五米）赤久繩山（一千五百二十二米） 西御荷鉾山（一千二百八十六米） 東御荷鉾山（一千二百四十六米） 稲含山（一千三百七十米）

赤城山黒瀧山金雞山白雲山金洞山を上毛の五色山と云ふ。金雞山以下は妙義山の支峰である。又赤城山榛名山妙義山を三名山と稱する事は三尺の童子もよく知る所まことにこの三山の並列は容易に得難き景觀である。この並列を完全に望み得る時に於て、風光更に大を加へ更に美を添へる。これを除いては展望時に無味なるを免れぬ。赤城は雄榛名は麗妙義は奇その配色の妙に至つては、恐らく天地創造の神の最も苦心したものであらう。淺間山の噴煙が無變化に陷り易き山水をして活動的ならしめ、或時はシナイ山となり或時はベスビオ山となることは到底見逃し得ぬ所で

ある。

國を東西に兩斷する大溪谷がある、即ち利根川の溪谷である。これを幹として枝となるべき四個の溪谷がある、即ち片品川吾妻川烏川渡良瀨川の溪谷である。更に小枝とも見るべき溪谷は山塊を寸斷して、縱走し横流してゐる。(流程は國內に於ける部分に就いてのみ數へた)

利根川(三十五里十八町)

湯檜曾川(四里)

赤谷川(六里四町)―須川、西川

薄根川(六里九町)―發知川、四釜川

沼尾川(四里)

粕川(八里)

早川(八里)

片品川(十五里十九町)―小川、塗川、泙川、栗原川、根利川

吾妻川(廿一里一町)―須川、溫川、山田川、名久田川、沼尾川

烏　川(十四里十二町)―井野川

碓氷川(十里)―霧積川、入舟川、九十九川

鏑川(十四里)―南牧川、西牧川、高田川、雄川、大澤川、鮎川

神流川(十八里)―黑川、三波川

渡良瀨川(八里十二町)―桐生川

利根川が大溪谷を開き河川の王者たるは、山岳の重疊と對比してその壯觀決して遜色はない。溪流の景趣は多く大同小異のものであるが、谷深く水淸きが故に至る所に奇を現はし幽を作り、殆ど迎接に遑なく、中にも吾妻碓氷は溪谷の奇勝を以て片品渡良瀨は瀧と飛橋とを以て神流は珍石を以て、吾妻片品は紅葉を以て各々世に現はれてゐるが、是等と稍趣を異にする鏑川にも亦捨て難い所がある。

この國の湖沼の多くは火山の產物であるが。平野も亦多數の沼を有してゐる。その主なるもの左の如くである。（括弧內は周回）

勢多　大沼（一里十三町）小沼（三十町）

群馬　榛名湖（一里二町）

吾妻　野反池（一里二十七町）武具脫沼（十二町）湯釜（十五町）水釜（十五町）

利根　菅沼（一里二十七町）丸沼（十七町）大尻沼（二十三町）尾瀨沼（三里四町）

邑樂　板倉沼（二里十四町）多々良沼（二里十二町）中野沼（十七町）御手洗沼（二十三町）近藤沼（一里三町）城沼（一里）

是等の湖沼は其の周回こそ小なれ、その境地、大沼は幽玄榛名湖は佳麗、菅沼は凄艶、尾瀨沼は深邃等各特色を異にするものあるは、山水美憧憬者の大に滿足する所である。榛名湖大沼は前橋高崎より遠からず、之を訪ふこと容易なればその名を

謳はるゝこと最も早く、菅沼尾瀨沼は邊土に在るがために、今尙は世人のその名を知らぬものすら甚だ多いが、湖沼の幽趣は彼に勝るとも決して劣らぬのである。

吾人は以下山岳溪流湖沼の各個に就いて、科學的に之を觀察し、その風景の大体を描き、併せてその案内の道程を記さんとする。

第二篇　山岳篇

第一章　金精峠

下野との國境に連亘する日光火山群を破るものは、利根郡沼田町より下野日光町に通ずる里道である。その國境上の峠を金精峠と云ふ、即ち金精山（二千二百四十二米）の北に位して、海拔二千二十四米。岩質は英斑凝灰岩より成る。

沼田町より十一里。頂上に金精權現の祠がある。金精山頭上を壓し、四顧連嶺の起伏波濤の如く、白根山は南に一段高く鼇座を設け、之と對して北に温泉嶽（二千三百三十二米）は傲然敢えてこれに降らぬ。西は鬱然たる大森林深谷を埋めてゐるが、東は湯の湖積翠の間に紺碧を落し、戰場ヶ原の茫漠たる彼方には男體女貌の二山、一は颯爽一は優婉の容姿を並べ、男体山の腰に中禪寺湖の一端を望む。技巧卓

絕の盆景はかくもあらうか。峠を下り里餘にして湯本に達する。又菅沼丸沼大尻沼の神仙境は峠の西一里日光道の傍にある。

第二章　白根山

一　總說

岩越上下四國の境界附近は帝釋山塊日光火山群越後山系等の聚まる所、山嶽複雜を極め峻嶺巨岳星羅して、眞に日本の脊梁たるの名に背かぬものがある。峰として二千米突以上ならざるはなき中に、巍然として九宵を衝き、連嶺これを環繞してその脚下に拜跪するが如きは、即ち白根山である。海拔二千五百七十七米。

金精峠の南方に當つて上野下野の境に跨る。山巓は下野に、西方の山腹八合目以下は上野に屬する。草津の同名白根山と區別する爲に俗に日光白根と呼んでゐる。全山輝石安山岩より成る。奧白根山前白根山(二千三百七十七米)の二峯に分れ、奧白根山は西に前白根山は東に峙ち、その間南北に傾斜する谷に五色沼を抱く。

奧白根山は頂上悉く石骨を露はして一樹なく、山巓は平坦。此處は新火口壁にして壁は多く破壞し、別に蜂の巢の如き小火孔がある。頂に小祠を祀る。その東に奇岩を疊む怪峯あつて絕頂の東南稍や平らかなる所に舊噴火口が殘る。八間程の方形の深穴にして常に水を湛えてゐる。怪峰の北方には大きさ數百間深さ測り知れぬ坑穴あり、雲霧不斷に渦き硫氣烈しく鼻を打つ。前白根山は舊火口壁の一端にしてその頂上には僅に矮樹を存する。この山は特に高山植物に豐富である。

五色沼は周圍凡そ十數町水底は岩石を敷く。深綠の水を湛えてゐるが水色は季節に依り雨水雪解水等の分量の多寡に從つて變化するので五色沼の名がある。岸に生ふる樹木はみな一葉を附けず宛然枯骨の如くである。

史に現はれたこの山の噴火數七回に及んでゐる。即ち後水尾天皇の寬永二年、後光明天皇の慶安二年七月、東山天皇の寶永二年、明治に入つて五年三月十二日、六年三月十二日、八年二月、二十一年十二月五日等である。

二　登山路

上野方面も下野方面も各一條を有するのみだが、普通白根登りと云へは殆ど後者に限られてゐる。山の上下には一日を要する。

上野方面よりするには、日光道の白根溫泉(沼田町より八里餘)より凡そ一里、小川の一の瀨と云ふ溪谷に於て日光道と分れ、東に聳える瑩塚山(一千八百八十四米)の横腹を北に這ひ、小徑益々崎嶇たらんとする遠鳥居に於て、菅沼の畔淸水より登る一路と會し、直板を懸けたるが如き不動坂を攀づれば途に不動尊六地藏賽の磧等がある、更に登つて血の池地獄と云ふ小沼のほとりを過ぎ、大日如來の祠前よりは一樹一草を見ず、巉巖突兀路頗る險峻である。大迂回して山巓に達すれば白根權現の祠がある。東を望むに日光の諸嶺指呼の間にあり。更に祠の東なる奇峰に登れば岩越上下四國の大半を一眸の下に集めて眺望頗る豪壯である。山を下り舊火口壁を横つて又も登れば一里にして前白根山に達する。この附近の裂開特に異狀を呈するを見る。

下野方面よりは先づ前白根山に登るのである。湯本(金精峠より一里餘)より西に向ひ細徑屢々危く、この邊り盛夏の候にも尙ほ白雪を殘してゐる。三里にして頂上に達すれば前面に奧白根山峨々として雲上に在り、嚴然として連峰の盟主たるに恥ぢぬも尊とし。俯して五色沼を望めば水は藍よりも濃く、天界の水は斯くも燦々たるかと驚かれる。

三　高山植物

日光白根は上毛山岳中高山植物の寶庫である。左表に就いて見るも他山に採集すべからざる多くを有してゐる。殊にシラネアフヒ、サンカエフ、ガンカウラン、イハヒゲ、ツガザクラ、コメバツガザクラ、コケモモ、ハナイカリ、タウヤクリンダ

ウ、オヤマリンダウ等は珍品と爲すに足る。中にもシラ子アフヒは本山を措(た)いて他に得がたきもの、多年生草本にして高さ一尺許り、葉は掌狀(せうぢやう)に分裂し上部の葉には葉柄ふく、花は辨なく葉は紫色を呈し花辨狀をなして四個莖頂(けいちやう)に開く、その殘雪の邊りに咲くを見る時は、實に艶麗(えんれい)なものである。

石松科　トウゲシバ△ヒメゲノカツラ△マン子ンスギ△カウヤマン子ンスギ
　　△シヨリマ

羊齒科　クジヤクシダ△ジフモンジシダ△キヨダキシダ△ヤマドリゼンマイ

禾木科　イブキヌカボ△イワカリヤス△タカ子カウボク△タチ子ズミガヤ△
　　ヤマアハ△コメス、キ△ムラサキス、キ△ミヤマイチゴツナギ

莎草科　ミカヅキグサ△シカクヒ

燈心草科　ミヤマスゞメノヒエ△ホソバノカウガイゼキセウ

百合科　バイケイサウ△タカ子シマラン△ツクバネサウ△クルマバツクバネ
　　サウ△アヲヤナギサウ△シホデ△マイヅルサウ△ウバユリ△ネバリ
　　ノギラン△ツバメオモト△チゴユリ△シヨウジヨウバカマ

蘭科　ハクサンチドリ△アリドホシラン△ニツクワウチドリ△アツモリサ
　　ウ△シラネチドリ

楊柳科　ネコヤナギ△チノヘヤナギ△コゞメヤナギ△ミヤマヤナギ△イヌユ
　　リヤナギ

樺木科　クマシデ△ミヤマハンノキ△ヤハズハンノキ△タケカンバ△ヨグソ
　　ミネバリ△シラカバ△チノオレ

楡科　ハルニレ△コブニレ

蓼科　ヤナギタデ△オホネバリタデ△ミヤマタニタデ△イブキトラノヲ△
　　ムカゴトラノヲ

毛莨科　モミヂカラマツ△シラネアフヒ△ヒメイチゲサウ△ミヤマハンミヨ

ウヅル△クサボタン△ニリンサウ△イチリンサウ△レンゲショウマ
△セリバワウレン

小蘗科　ヒロハヘビノボラズ

虎耳草科　イワガラミ△ヅダヤクシュ△ゴトウヅル△ミヤマネコノメサウ△ウメバチサウ△シラネヒゲサウ△トリアショウマ△ギンガサウ△タマアヂサヰ

薔薇科　ホザキシモツケ△カマツカ△ゴエフイチゴ△エビガライチゴ△クマイチゴ△ヤナギイチゴ△ナツユキサウ△エゾノウハミヅザクラ△ウラジロノキ△ミヤマメザクラ△ハカリノメ△ミヤマウラヂロイチゴ△イワキンバイ△ナヽカマド△アヅキナシ

岩高蘭科　ガンカウラン

菫菜科　エゾスミレ△ミヤマスミレ

槭樹科　ウリハダカヘデ△メグスリノキ△ミネカヘデ△ハウチハカヘデ△アサノハカヘデ△テツカヘデ△チガラバナ△ミツデカヘデ

金糸桃科　トモエサウ△ヒメオトギク△ミヅオトギク△ギヤウヂヤノミツ

泡吹科　アワフキ

五加科　ハリブキ△コシアブラ△トチバニンジン△イモノキ

鼠李科　クマヤナギ

獼猴桃科　サワナシ

酢醤草科　ミヤマカタバミ

牻牛兒苗科　ゲンナイフウロ△ミツバフウロ

繖形科　ミヤマシキミ△シラネニンジン△ミヤマセンキウ△カノメツサウ△センタウサウ△イワセンタウサウ△シラネセンキウ

山茱萸科　ゴセンタチバナ

鹿蹄草科 ジンフリイチヤク△コバノイチヤク△コメイチヤク△ギンリヤウサウ

石南科 イワヒゲ△ハナヒリノキ△ハコツヽジ△ホツヽジ△ミヤマホツヽジ△ミツバツヽジ△レンゲツヽジ△ツガザクラ△コメバツガザクラ△コケモモ△ツルコケモモ△クロマメノキ△クロウスゴ△ウスノキ△シヤクナゲ△ムラサキヤシホ

岩梅科 イワカヾミ

木犀科 コバノトネリコ

龍膽科 ハナイカリ△タウヤクリンダウ△オクヤマリンダウ

馬鞭草科 カリガ子サウ

唇形科 イヌゴマ△ミソガハサウ△チシマオドリコサウ△エゾマシロ子△テンニンサウ

玄参科 ハンカイアザミ△ヤマトラノヲ△マヽコナ△ミヤマヽコナ△シホガマギク△ヒナノウスツボ

苦苣苔科 イワタバコ

茜草科 ヨツバムクラ

忍冬科 クロミノウグヒスカグラ△ウコンウツギ△ミヤマウグヒス△ミヤマシグレ△カンボク

敗醬科 キンレイクワ

桔梗科 シデシヤジン△ヒメシヤジン△ホソバノツリガ子ニンジン△ソバナ

菊科 フジアザミ△ヒトツバヨモギ△タイミンガサ△オヤマボクチ△ナガハノカウヤバウキ△ゴマナ△ミヤマカウゾリナ△ミヤマギク△ニガナ△カウモリサウ△カニ.カウモリ△アキノキリンサウ△メタカラカウ△キンゲラマ△タウヒレン△キオン△ヨツバヒヨドリ△ヨブスマ

サヲ△ハンゴンサウ△タムラサウ△ヤブレガサ△シラヤマギク△ヨタカラサウ

水龍骨科　イワトラノヲ△オホバショリマ△ナンタイシダ△ヤマドリシダ△フクロシダ△シノブカグマ△シラ子ワラビ△メンマ

第三章　武尊山

利根郡中央部に居然たる大山塊あり、その最高峰にして利根川水源地の大關門(だいくわんもん)となり之を蔽(おほ)ふものは武尊山である。海拔二千百五十八米、遙かに日光白根と對峙して四山に君臨(くんりん)してゐる。山上に日本武尊を祀る石祠及びその銅像がある。

主峰を繞(めぐ)るものに前武尊山(二千三十九米)　劍ヶ峰(二千五米)　鹿俣山(一千六百三十六米)　高平山(一千三百七十三米)　幕掛山(一千四百九米)　寶台樹山(一千百五十三米)　等あり迦葉(かせふ)山亦之に連り、溪谷四境に開く。全山を成すものは輝石安山岩である。

山の東西に大溪谷がある。即ち東は片品川(かたしなかわ)の溪谷、西は利根川の溪谷である。東邊より發する工戸澤西俣澤十二澤等の水は集りて塗川となり片品川に注ぐ。湯小屋(ゆのこや)川武尊川夜後澤等は西北邊に發して利根川に入る。又薄根川は南邊より發し根川と

發知川とを合せ、沼田町の北に於て利根川に合する。

南麓川塲村川塲湯原（沼田町より二里）より登れば二里十八町、北麓片品村大字藤原（沼田町より十一里）の平出より登れば五里、頂上に立つて東西の大溪谷を俯瞰し、白根赤城榛名淺間等の諸山挺然群峰を壓し、雲霧の徂來極まりなきを見る時は、眞に天地の壯嚴時の永却の流を感ぜざるを得ぬ。

第四章　迦葉山

迦葉山は武尊山の南西に連るもの、發知山は武尊山より發し二山の間を南下して薄根川に注ぐ、東南更に三峯山を起す。山は輝石安山岩より成り、海拔一千三百二十五米。

池田村大字上發知（沼田町より三里）より登り、その里程一里。道は發知川を渡り東門の村落を過ぎ直に北に向ふ。綠樹鬱々として繁り滿山ために天日を仰がざらんとする。山腹に龍華院彌勒寺がある。嘉祥元年慈賢大師の草創と云ふ。寺域は峨巖牛天を隱し、老杉亦牛天を蔽ふ。森林中に奇鳥佛法僧慈悲心鳥の啼くを聞く時は、靈境に法悅を味はふの心地する。頂上よりの眺望は片品の溪谷を隔てゝ赤城の雄姿を望み、畫にもせまほしき景觀である。

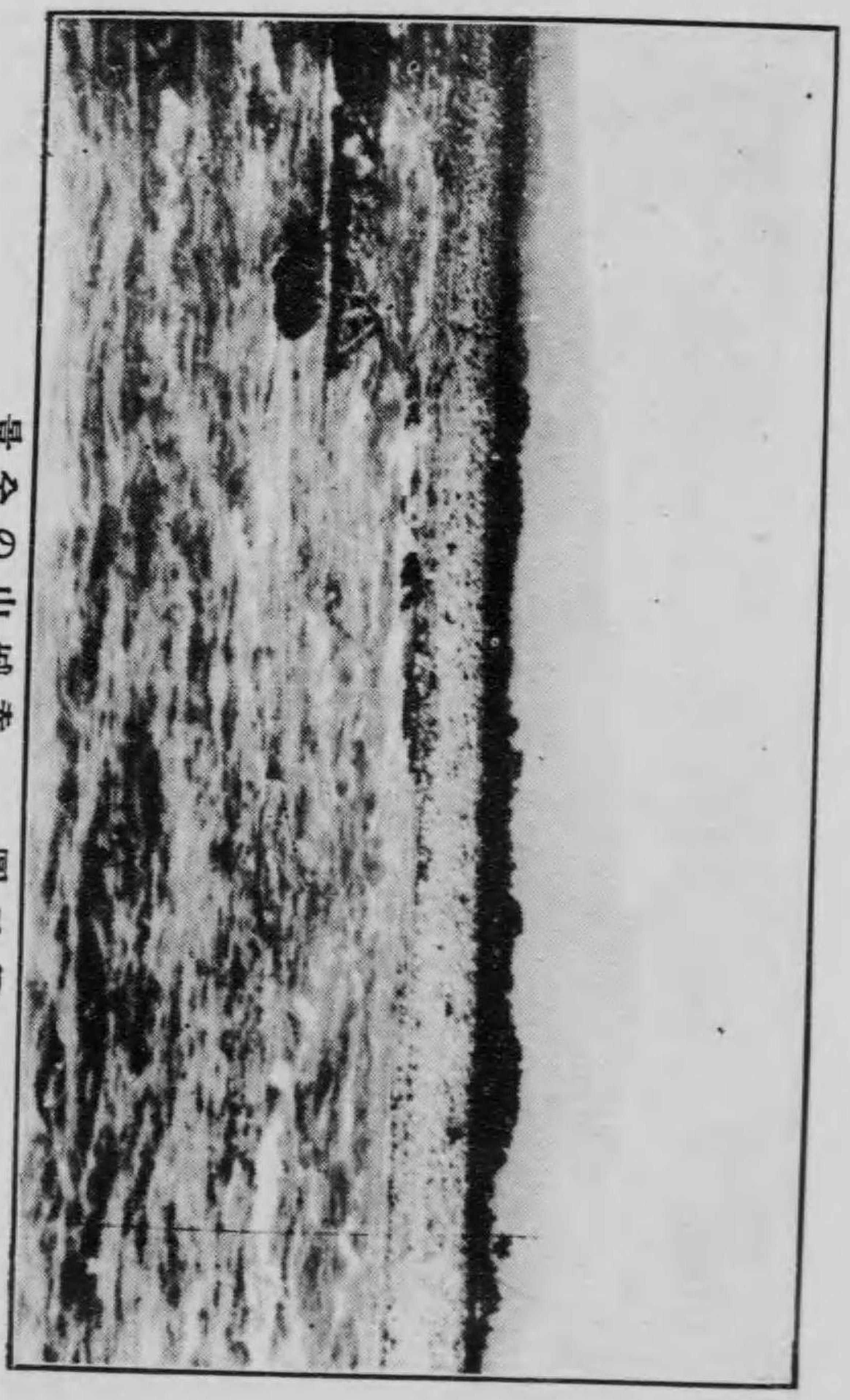
第五章　赤城山

一　總説

北より南に走つて上野下野の國境を作る日光火山群が、忽然その西方に崛起せしめたものは赤城山である。然れば南は直ちに平野に歸し、北は大なる片品谷を生み以て武尊連峰と對する。

山は勢多利根兩郡に跨る。即ち郡界線は皇海山より起つて西に向ひ、小黒檜山の南を過ぎて大黒檜山の絕頂に上り、下つて大沼の北岸を掠め再び上下して西麓を兩斷し、遂に利根川の溪谷に至つて盡きる。小黒檜山のみを利根郡に與へ、他の高峰は悉く勢多郡の領する所となる。

その占むる所の地域凡そ東西二十七基米南北二十基米、最高峰黒檜山は千八百二



第二圖　赤城山の全景

十三米。昂然としてその威容上毛山河の王者たるの觀がある。

全山輝石安山岩を以て成り、標式的二重式消火山にして舊火口二個あるが、その一個は缺損して殘らず他の一個は大沼之を侵した。中心火口丘は沼の東の東南に聳ゆる地藏ヶ嶽(一千六百七十三米)、火口原湖は大沼火口瀬は沼尾川、外輪山は黒檜山駒ヶ嶽五輪嶽野坂嶽荒山等その主なるものである。この外輪山の直徑は凡そ東西三十米南北四十米にして楕圓形を造つてゐる。

大沼の西に鈴ヶ嶽(一千五百六十四米)、荒山(一千五百七十一米)の西南に鍋割山(一千三百三十二米)、黒檜山の北に小黒檜山(一千四百四十六米)、又南に長七郎山(一千五百七十九米)あり、是等は山の主峰であるが、黒檜山地藏嶽鍋割山荒山鈴ヶ嶽は赤城の五山と稱せられる。長七郎山の東北に小沼の水を湛ふ。これまた一の火口湖にして寄生的に噴出した火口に雨水を集めたものである。この寄生火山の火口壁を作るものは即ち長七郎山及び小地藏山である、沼尾川の南に當る圓錐形の一峰

は全山富士岩柱より成り一見甚だ寄生火山に似てゐるが、浸蝕作用を免れた熔岩流たるに過ぎぬ。

この山の噴火にして史に殘るものは後深草天皇の建長三年四月十九日一回にして今より凡そ五百六十年前のことである。

山中より發する水は西麓に沼尾川の外北麓に湧き流るる諸水は根利川に入り、川は赤城根村大字日向南郷にて片品川に注ぐ。地藏ケ嶽より發する白川は西南に下り南橘村に於て桃木川に入る。小沼の水は粕川となり佐波郡島村に於て利根川に注ぐ。又東方に發する諸水はすべて渡良瀬川に流れ込む。足尾山中より來る渡良瀬川は即ち足尾山塊と赤城山とを分つものである。

又山中に湧出する鑛泉としては、地藏鑛泉梨木鑛泉湯の澤鑛泉瀧澤鑛泉等を其の主なるものとして數へる。

赤城山の特色として第一に指を屈せらるゝはその山形である。火山の常としてそ

の諸峯が多く圓錐形なるのみならず、全体に於ても亦完全なる圓錐形を成してゐる殊にその峰より麓に引く緩かにして長き線條は見るものの眼に温柔優美の感を與へ毅然として雲表に聳ゆる形貌はやがて壯嚴雄大の粹なるものである。從つてその裾野の三方に廣濶なる他に容易に認め難しと思はる。五峯の對立の完全は秩父方面より望み、圓錐形の齊整は尾瀬峠に立つて發見し得る。加之大沼の深邃幽寂は都人士の愛を鍾め來り遊ぶもの甚だ多く、高山植物に豐富にして珍品少なからざるは、學生の好んで採集する所である。

二　登山路

赤城山の登攀は決して困難ではないので、その登山口の如きも頗る多數に上つてゐるが、主なるものとしては

一　小暮道（勢多方面）

二　大胡道（勢多方面）
三　上神梅道（同　）
四　八崎道（同　）
五　深山道（同　）
六　南郷道（利根方面）

小暮道　前橋より登る一路である。大沼湖畔まで六里餘と云ふ。街の北を出外れ暫らくは稲田桑園の間を行く。進むに從つて最南峰鍋割山は胸を張る巨人の如くに眼前に迫り來て、雄壯なる眺めである。上細井村よりは漸く坂路となり樹林の間に茅屋点々、松並木の蔭に憩ふて勇を鼓し登る程に小暮村に達する。前橋より二里。此處に登山者の爲めに休み茶屋あり、平野を展望し鍋割山荒山は指呼の間にある。一の鳥居を潜りてよりは道狹く樹林密に、やがて大松原に入る。小徑屢々草叢に呑まれ涯しなき森林の、しばしは人の心を暗く閉すのである。大松原を抜け出でて小松

原に入る。鍋割山右に峙ち硯山左に傾く。間の谷はやゝ廣く明るく、林の奥に老鶯の啼く音淋しく淙々の音耳にさはやかなるは白川の瀬音である、川を渡り單調なる草原を縫ひ行けば、箕輪村に達する。峰の迫れる所民屋十餘皆な山を負ひ。柵を構つて牛馬を飼ふ。再び白川を渡りて後は溪谷次第に狹まり、密樹鬱々晝尙ほ暗きを覺える。一里程登り溪の半ばにして道を右に折れゝば地藏鑛泉がある。愈々登れば新坂峠の急峻となつて溪は盡きる。峠に立つて望む。地藏ヶ嶽黑檜山鈴ヶ嶽鼎立し大沼をめぐる外輪山の連亘は、狹小なれども壯嚴である。疎林の間を下り行くと林間に明鏡の如き大沼の水を認む。道を離れて高きに立てば、靜然として樹影山形を寫しその全体を見ることができる。沼の岸で道は二條に分れ、右すれば大洞赤城神社に至り左すれば沼尻に達する。兩所に各一戸の旅舍がある。赤城神社の祭神は磐筒男愈外四神。

黑檜山　湖畔より登ること三十町にして黑檜山の頂上に達する。沼東の岸小鳥ヶ

島に近き所より道を求めて登る。二十町ばかりは山毛欅槲榛榛等の深林である。樹林盡きてや、廣濶なる草原あり、眺望佳絶飽くことを知らぬ。此處より上は樹影を見ず、急峻なる石骨の峰を攀ぢて絶頂に達する。平坦一町程にて東南に傾き、二個の石祠がある。綠草中姫百合の朱躑躅の淡紅錦繡を織る。立つて四顧すれば南々西に富士の靈峰を認め、之に續く連嶺は南西に甲斐ヶ根八ッ嶽五料山、正面に淺間の噴煙昇り妙義は尖り榛名は丸く、稍や北して草津白根群峰を壓し、正北に双峰の武尊山眉に迫り、東しては會津の諸山日光一帶の連山一起一伏し、東南平野の間に筑波山突兀たるを望む。雲霧脚下に湧き豪宕雄偉言語に絶せんとする。

●●● 地藏嶽　頂上まで湖畔より凡そ一里。殆んど路なく熊笹を分けて登られればならぬ暫くは雜木の間を行き中腹よりは草原のみである。

●● 荒山　頂上は十數疊敷の平坦であるが、東面絶壁下に峭り怪岩乱立するがために登攀困難且つ危險である。纔に獵師の過ぐるのみと云ふ。小暮より鍋割山に添ふて

登れば稍や容易である。

●●● 大胡道　前橋よりする他の一道である。市の東へ二里十餘町にして大胡町あり。北に轉じ傾斜頗る緩慢の裾野を一里行けば宮城村の三夜澤に達する。此處に赤城神社がある。是を里宮と云ひ大沼畔なるを本宮と呼ぶ。道遽かに急峻となり三十町ばかりにして二條に分る。右を行けば瀧澤鑛泉あり更に十町にして不動瀧懸る。小沼の水流れ落ちて奔跳するもの高さ百六十尺幅三十尺。左を進めば十數町にして湯の澤鑛泉である。荒山腰の溪流に位して、集塊熔岩の裂罅より湧出する炭酸泉である牛岩峠や岩躑躅乱れ咲く躑躅が峯を過ぎて荒山の北に出で、地藏ヶ嶽の南を廻つて大洞に達する。三夜澤より凡そ二里。

●●●● 上神梅道　足尾鐵道に依つて上神梅驛まで上り、下車して西に向ふのである。山徑いとど狹く且つ急に、約一里にして梨木鑛泉に達する。群山四圍に重疊し、翠嵐浴槽に通ひ清籟耳を洗ひ、避暑に適する仙境である。泉質アルカリ泉にして溫度二

十度。皮膚病腺病神經痛等に特効ありと。急坂を攀ぢ檜の森林を過ぐれば山愈々高く、峯の背を傳ひ熊笹を分けつゝ登り、二里餘にして湯の澤鑛泉に至る。

八崎道 伊香保澁川若しくは吾妻方面よりの登山者が選ぶものである。澁川より利根川を渡つて八崎村に出で、四里程勾配緩慢なる裾野をひた登りに登る。左右は單調にして變化乏しき松の殖林である。道漸く急峻となり焦砂磊々、兩側に深谷開き、仰げば屏風を立てたるが如き連峯眼に鮮かにして、鍋割を右端に立て荒山は兀然地藏ヶ嶽は丸く、正面に黒檜山一際挺んでゝ高く、鈴ヶ嶽左方に屹然たるを見る峻險極まつて姥子峠となる、下ること一里にして前橋道に合する。

深山道 八崎村より山の西麓の裾野を北に廻れば、三里餘にして敷島村大字深山村に達する、此處より大洞迄三里。若し沼尾川の奇景を探らんとするなれば、この道を選ばねばならぬ。川と離れて山中に一道通ずるが、これを捨てゝ他の一道を取り川を渡り川に沿ふて登れば絶壁迫つて高き所に飛瀑懸る。大瀧と云ひ高さ數丈。

進んで數十丈の絶壁の間を二三町行き、潜下新開に出で更に鈴ヶ嶽の北に至る。落葉樹深谷を埋め、秋期紅葉の美最も賞すべきものがある。四五町の峠を越して沼尻に達する。

南郷道 利根方面の登山口である。沼田町より三里半、又追貝より一里半、片品川は赤城根橋の下にて一水北より來りて川に注ぐを見る。根利川とて赤城山の東邊より發するものである。合流点附近の村落を日向南郷日影南郷と云ふ。此處より大洞まで三里、根利川岸を稍や上り右に橋を渡る。この邊りには裾野を現はさず山勢急である。暫くは西に山裾を廻り、曲つて南に登れば道益ゝ險しく、青木砂川等の村落を過ぎ、溪流を右に見左に眺めて進めば、黒檜の雄峰崇高の姿を仰ぐ。溪盡きて、黒檜山の西を登り、峠一つ越えれば早や沼尾である。

三　高山植物

赤城山の高山植物はかなり豊富にして、殊にモウセンゴケ、ムシトリスミレ、クマガイサウ、アツモリサウ等は人の皆なよく知るところである。

瓶爾小草科　ナツノハナワラビ

石松科　ヒカゲノカツラ△マンネンスギ

百合科　シヤウジヤウバカマ△ネバリノギラン△バイモ△キミカゲサウ△マイヅルサウ△チゴユリ△ウスユキサウ△エンレイサウ△ツバメオモト△タケシマラン△タチテンモンドウ△ツクバ子サウ△クルマバツクバ子サウ△ウバユリ△アマナ△カタクリ△ハウチヤクサウ△クルマユリ

蘭科　オニノヤガラ△カモメラン△テガタチドリ△クマガイサウ△アツモリサウ

金栗蘭科　ヒトリシヅカ△フタリシヅカ△ウスバサイ・シン

樺木科　シラカバ

石竹科　フシダカフウロ

毛茛科　トリカブト△レイジンサウ△ヤマシヤクヤク△カラマツサウ△サラシナシヤウマ△ヤマオダマキ

茅膏菜科　モウセンゴケ

小蘖科　イカリサウ

虎耳草科　ダイモンヂサウ△バイカウツギ△ウメバチサウ

牻牛兒科　キツ子フ子

酢漿草科　ミヤマカタバミ

山茱萸科　ゴゼンタチバナ

蟻塔科　アリノトウグサ

繖形科　ミヤマサイス△ホタルサウ△シラカハバウフウ

五加科　チクセツニンジン△カクレミノ
石南科　アケボノツヽジ△ハコツ・ジ△ドウダンツヽジ△ミツバツヽジ
鹿蹄草科　ギンリヤウサウ△ウメガササウ△イチヤクサウ
櫻草科　ユキワリサウ△クリンサウ
茜草科　キヨタサウ
敗醬科　ハクサンオミナヘシ△キンレイクワ
玄参科　ヒキヨモギ△シホガマギク△クカイサウ
狸藻科　ムシトリスミレ△ミヽカキグサ
桔梗科　シデシヤジン△ソバナ△ヒメシヤジン
山蘿蔔科　マツムシサウ
菊　科　ハンゴンサウ△アキノキリンサウ△カセンサウ△ヤマハヽコ
蘿摩科　フナバラサウ

水龍骨科　リヤウメンヅル△ツヤナシイノデ

第三圖　榛名山二ッ嶽

第六章　金山

赤城山の東南に當る平野中に突如丘陵の現出を見る、即ち金山である。思ひ出した樣にとはこの事か、白根火山群の事業もかなり興味を以て見ることが出來る。全山輝石安山岩より成り、海拔二百二十米。

太田町を出で北へ行くこと數町、山の西南麓に巨刹大光院がある。山の頂上へは更に十餘町、滿山松樹蔚蒼として清籟耳に絶たず、又松山と云ふもこの故である。展望頗る開豁にして、大利根を中心として山河悉く双眸に集り、平野は海洋の如く茫漠、利根川は白蛇の如く蜿蜒、煙霞棚曳くところ、日光の諸山巒立し榛名妙義は稍や遠く、淺間山は遙かに大平原を睥睨する、山低ふして野あり、野盡きて淡靄模糊、一幅の活畫圖と云ふも未だ足らぬ心地がする。頂上に新田義貞を祀る新田神社あり、又古城址今に殘る。一名新田山と呼ぶも此の故である。

第七章　榛名山

一　總説

赤城山と榛名山とは壯嚴なる利根川溪谷の偉大なる衞士である。彼は川の東に是は西に劔戟を執つて神聖の地を一步も冒されまじとするが如く、いやが上にも豪爽である。かつまた赤城山は利根の連山を率ひ、榛名山は吾妻の群峰を統べ、河を隔てゝ兩大將陣頭に見ゆるの觀がある。即ち榛名山はその山貌その高峻赤城山と比肩するの名山と云はねばならぬ。

海拔一千四百四十八米。群馬郡の北部に崛起して、吾妻郡との境界線は斜めにその西北の一半を割く。群馬郡唯一の山岳であるから、主要部分は悉く是に集つてゐる。切截圓錐形の山塊の北邊を吾妻川廻り、南邊を烏川まつはり、西邊を吾妻川の支

流溫川穿ち、而して利根川その東邊を限り、四圍川を以て帶せらるゝさへ不思議なのに、赤城山子持山吾嬬山鼻曲山碓氷峠妙義山等圓滿に環列するが如きも亦妙である。

是亦た一個の標式的二重式消火山である。即ち榛名富士（一千三百三十米）は中心火口丘、榛名牧場は火口原、榛名湖は火口原湖、沼尾川は火口瀨、烏帽子岳（一千三百六十五米）鬢櫛山（一千三百四十七米）硯嶽、掃部嶽（一千四百四十八米）氷室山（一千二百三十六米）摺碓岩等は外輪山である。この外輪山の東南の直徑は七町餘に及ぶ。

榛名富士は伊香保富士とも小富士とも云ひ、榛名山の東北岸に聳え美麗なる圓錐形を現はして三十度內外の傾斜をなし、湖面より高きこと二百五十米、頂上の舊火口は馬蹄形をなして東に向つて開き、殘壁は北方殊に高く火口內より東方の開口に向つて熔岩の流出した跡がある。今は火口埋まつて平面となり、僅に草を生するの

みにて樹木を見ぬ。全山輝石安山岩より成り麓に一峇山と云ふ突起がある。烏帽子岳は榛名富士北方にありて、杭狀節理を呈する富士岩より成り、形風折烏帽子に似る。鬢櫛山はその西に在て集塊熔岩より成る。湖の西岸なる硯嶽は杭狀節理を呈する富士岩より成り、頂上の大岩は硯形を立てた如くである。掃部嶽はその西南に在つて連嶺の最高峰である。又外輪山の南西部は堤防狀をなして殆んど高低を見ない。

伊香保平を隔て榛名富士の正東に相馬山（一千四百十一米）屹立し、その東北に二ツ嶽（一千二百四十二米）を出す。二山共寄生火山である。相馬嶽は黃閃輝富士岩より成る乳房山であるが、爆烈作用のため深く抉れて嶂壁を作り容易には登攀し得ぬ。二ツ嶽は完全なる圓錐形をなして頂上三峰に分れ、男嶽女嶽は東西に對峙し、南方の小峰を孫嶽と云ふ。頂上には舊噴火口殘る。山の東南西三面は高さ凡そ三百米の絕壁峭り立ち、北の一面のみ平野に接する。この平野は北に延びるに從つて少しく高く、俄かに高くなつて屛風岩の如くなる下に伊香保町が竝ぶ。この山と外輪山と

の間には地獄谷と云ふのがある。その底には直徑二三間の孔が殘つてゐるが噴氣の遺跡であらうと云ふ。

山の南方遙かに聳ゆる鏡臺山（一千七十五米）には馬蹄形をなした火口あり、就いて見るに數回猛烈に爆發したものらしく思はれる。又二ッ嶽の東方の淺間山或は水澤山（一千百九十四米）も一個の寄生火山で、北西南の三面外輪壁を以て圍繞されてゐる。

その他の高峰には湖の南に天目山（一千二百米）鏡臺山の東南に天狗山（一千百七十九米）相馬山の南に鷹の巣山（九百五十四米）音羽山（一千十四米）鐘撞山（八百四十二米）種山（九百九米）北に五萬石（一千六十米）二ッ嶽の東北に上の山（九百七十六米）物聞山、淺間山の東南に船尾山（八百三十一米）掃部嶽の西南に杏ヶ山（一千二百九十二米）西北に居鞍嶽（一千二百四十米）古賀良山（九百八十一米）等がある。

山中に發する水は火口瀬沼尾川が北流して吾妻川に注ぐと、西南麓より發して東流し烏川に入る井野川とを除いては、他は皆な小溪流に過ぎず茲に之を擧ぐるに足りぬものである。

典麗なる切截圓錐形を描き、四方に遠く裾野を引くは、見る眼に美はしきは云ふまでもないが、この山をして天下に著名ならしめたものは伊香保の靈泉である。而して之を中心として榛名湖を取り入れた、一帶の峻山高原の公園的風致にある。一山悉く天然の公園を成せるはこの山を措いて他に求め能はぬところ、恰も國の中央に位して遊樂境中の遊樂境たるの觀ありと言はうか。

二　登山路

交通機關の具はれるこの山の如きはない。遊樂境中の遊樂境として寧ろ當然のことである。山腹伊香保迄での電氣鐵道の便は、登山者に取りて大部分の苦痛を除去せられたものである。登山路の主なるものは左の如くであるが、山中の道路は殆ど

四通八達の觀がある。

一、澁川道

二、箕輪道

三、室田邊

四、倉田道

五、香妻道

澁川道　高崎水力電車會社の電車は澁川町を過ぎて伊香保町に通ずる。利根發電株式會社の電車は前橋を起点として澁川に至り高崎線に連絡するが、又直通車運轉に便もある、澁川より伊香保まで七哩。沿道の風光は歐洲アルプスの遊樂境瑞西もかくやと思はるゝばかりである。急勾配に敷設したことゝて線路は右曲左折すること八十七回。顧みれば利根川の大溪谷は赤城山との間に巨口を開き、之を俯瞰する連峯は或は豪、或は優、或は怪。車輪軋る下に老樹參差谷間に綠翠をたゝみ、淡靄

引いては流れ流れては卷く。山影時に霞み時に朗らかに、山水の繪卷物を飜して無限の頁を餘す。仰げば水澤山は車窓に近く、軌道林間に入り溪上に現はれ、春來つて綠蔭に躑躅花いさしげに、秋更けて滿谷朱に燃え、車は即ち天上に我を誘ふの飛雲にあらざるなきやを疑ふのである。顧望漸く狹少となるかと思へば忽ちにして深谷の上に出で、須臾にして伊香保に着する。車に在る事一時間（下り四十分）。又舊道を徒歩すれば爪先上りの二里十五町、電車軌道の傍に連る。沿道の風光を探らんとするなれば徒歩に限ること云ふまでもない。途の中ばにして老松一株亭々之に柵したものを見る。御蔭の松とて英照皇太后伊香保行啓の砌り御休憩遊ばされた所である。御蔭の茶屋の前に清徹の清水湧く。このほとりに電車上下の交換点が設けられてある。

伊香保溫泉　電車を乘り捨て物聞山下の急坂を登り、物聞橋を渡れば伊香保である。溫泉は鹽類鋼鐵泉にして溫度四十五度。血液を增加するに妙、貧血症病後衰弱

婦人血の道小兒發育等に神効がある。八ヶ所の岩石の裂罅より沸々と湧く湯を樋にて引き、溫泉宿數十戶。町は山腹に據つて溫泉宿商家は層々上下に連り全町一大階段をなすの觀がある。山を負ひ谷に臨み、眼前累々の山塊は赤城小野子子持の諸山である。翠嵐山谷に湧いて天地幽寂、黃塵も拒み邪念も忘る。附近の名所としては四五町にして湯元の公園あり、河鹿澤湯の澤には河鹿を聽き、猿澤橋の對岸に屛風岩の巖壁あり、その橋の袂の躑躅ヶ丘は躑躅に美しく紅葉に華かである。秋草の名所湯の平の高原に桔梗蕣苅萱女郞花咲き誇つて美し野と呼ばれ、樵夫の唄砧打つ音さては杜鵑の聲を聞く山あつて物聞山と名づけられ、見晴しの高所に登れば峽峰高原或は平野を望んで廣闊雄大、地藏ヶ原の裾野では春は蕨狩り秋は花摘み、瀧では黃金の瀧七重の瀧等皆な名高いもの。

榛名湖　町の奧へ奧へと登れば湯元に出る。その入口に一橋架り之を渡らずに進めば湯元、渡つて山路を攀れば榛名湖畔に至る。この道は稍や急峻、ある時は山腹を樸ぎりある時は斷崖上に這ふ。二ッ嶽相馬山左手に雲を突く。半里にして瘦胸峠に達する。峠の西は伊香保平一名榛原の高原である。連山四方に環列し中央に圓錐形の榛名富士はその全景を現はしてゐる。勾配緩き新道は坦々一直線にて、峠より一里その林中に沒するところ榛名富士の裾に榛名湖の水を湛えてゐる。峠より下ること二十町左手に高原盡くる所に摺碓岩の巨巖がある。攀ぢて登れば中央に大孔口を見る。南方は谷を割き上武の平原を煙霞の裡に望む。

榛名神社　湖畔より小坂を登り盡した所は天神峠である。峠上に榛名神社の大華表立つ。此處より北面榛名湖の眺望甚だ美である。峠より榛名神社まで十八町、新舊の二道がある。谷には古松老松鬱茂し溪水潺湲、急坂を下ること十二三町にして谷川の對岸に鶴の頸を延べたるが如き奇岩を見る。葛籠岩とて高さ卅丈、尙ほ行くこと數町にして榛名神社の裏門に達する。社域は奇巖怪石兀々として雙龍門に柱狀の巨巖鉾ヶ嶽あり、本社の背後に人の形に似たる御姿岩がある。谷を隔てゝ見る橋

の如く鞍の如きは鞍掛岩と云ふ。神社は彦田支命を祀る。丹碧に彩り金銀を鏤め頗る華麗である。尙ほ進んで袖摺岩雷電岩大黑岩瓶子岩獅子岩等の奇景枚擧に遑なく、御稜橋隨神門龍神橋を過ぐれば唐銅の大華表あり。石段の下に連るは榛名山村の古驛である。

●●●相馬山　伊香保平坦路の半より一路東南に分れ一峻峰の麓に連る。峻峰は即ち相馬山である、その小徑を辿り數町にして山麓に達し登るほどに白木の鳥居立つ。此處よりは歩一歩險阻を極め、全山焦石磊々、進み惱むこと甚しい。渓上に隘路あり脚膝戰き、急峻あり岩を捉へて攀ぢ、絕壁徑を斷つに逢ひ三間餘の鐵鎖に縋つて登れば稍や廣やかなる處に出る。又も鎖を生命の綱とたのんで斷崖を攀ぢ漸くにして頂上に達する。九合目迄では灌木疎生してゐるが以上は全く石膚である。頂上を踊峰と云ひ黑髮神社の小祠がある。この山は又の名を黑髮山或は阿蘇山と呼ばれる北に吾妻利根連山の起伏は壯大、左右に赤城淺間は魁偉、妙義の奇峰は眼下に展開

し、遠く東南の方に八面玲瓏の富士を拜する。利根川は赤城山と榛名山との渓谷の底を流るべき筈なるに、さはなくして恰も銀蛇赤城山の腹を卷くが如くに見えるのは一種の奇觀である。東南麓より登るなれば道は更に險難にして、鐵鎖の力を借ること三度、梯子を賴むこと二度に及ぶ。

●●●二ッ嶽　伊香保湯元の橋より榛名湖道を凡そ半里にして、急坂の中途に鷲の巣茶屋がある。此處より一道岐れて左に入り、二ッ嶽を西南の方に仰ぐ。その頂上西北の稍や高き峰は男嶽、南の稍や低きが女嶽、兩峰恰も駱駝の背の如き形である。滿山悉く焦石にして形狀怪奇の岩石累々としてゐる。北麓の平原は湯の平とて秋草の名所である。この平原盡きる處に蒸湯あり。泉質硫化水素瓦斯にして皮膚病痔疾等に特効ありと云ふ。附近の巖陰には盛夏の頃にも尙ほ氷を見る。又此處より東北に向つて別道通じ、平原を橫斷して上の山及び物聞山の背面に出で、伊香保神社の境內に下る。

水澤山　淺間山の別名で頂上に淺間神社を祀る。伊香保より澁川道を下ること八町にして地藏河原の高原に出で、此處にて澁川道と別れ、高原の中を右に進めば凡そ三十町にして水澤に達する。此處なる水澤觀音堂は板東三十三番札所の第十六番水澤寺は天臺宗の古刹である。水澤山の奇峰は西方直に碧空を突く。更に二十町山脚の草徑を辿り溪谷の上に出づれば、鋸齒狀をなして連亘する船尾山(吾妻山)が、西端水澤山に接觸する所に一瀑直下する。船尾瀧(不入の瀧)とて高さ二十丈三尺幅三間、巖に奔激して二段となる、上なる雄瀧は十七丈一尺、下なる雌瀧は三丈二尺轟々地軸を震撼せしめる。瀧壺は谷狹く懸崖に圍まれて頗る物凄い、下流は瀧の澤に注いで利根川に入る。二ツ嶽山下の蒸湯まで十數町、又溪を南へ渡つて西に折れ十數町行けばガラメキ溫泉がある。相馬山の東南麓に當り、泉質は鹽類泉にして溫度七十八度。微溫湯なれば沸かして用ひ火傷皮膚病梅毒等に効ありと云ふ。此處よりも富士山を望み眺望勝れてゐる。伊香保平より擂碓峠を過ぎ相馬山の南麓をめぐりて此處まで一里。伊香保神社より上の山を越え、水澤山の西邊を過ぎて此處まで一里二十四町。

水澤まで　水澤村に集まる登山路は五道ある。内四道は高崎澁川間の國道を起點とするもの、北より數へて第一道は豐秋村大字石原村より登るものにして二里。第二道は豐秋村大字行幸田村より登るものにして一里半。第三道は豐秋村大字有馬村より登るものにして二里。第四道は明治村大字上野田村より登るものにして二里半而して第五道は箕輪村大字西明屋より登るものにして四里。

箕輪道　高崎市よりガラメキ溫泉を過ぎ、伊香保町或は榛名湖畔に至るものである。高崎より西北に向ひ緩慢なる斜面を三里登れば箕輪村に達する。村の大字西明屋なる椿山に箕輪城趾あり、大永六年長野信業の築く所と云ふ。更に進んで井野川支流の溪谷に入り、物見塚附近よりは益々急峻となり相馬山二ツ嶽次第に近く、やがてガラメキ溫泉に至る。箕輪村より四里。又箕輪村より井野川本流の溪谷を辿り、

榛名山御料地を過ぎ、三ツ峰の南に於て溪流を渡り、地藏峠を越えて行けば榛名山村に達する。高崎より七里。

物見塚まで　物見塚は船尾山の南麓の丘陵で海拔六百五十五米。ガラメキ溫泉を距る二十町餘此處に集る登山路は三道ある。一道は即ち箕輪道で、他は淸里村大字笹熊より登るものと、金古町より登るものとで何れも二里半。

室田道　高崎市より烏川の北岸に沿ひ、山の南面を望みつゝ進み、五里十餘町にして室田町に至り、此處より山腹を橫ぎりつゝ登る。八本杉にて溪流に近づき、その東岸を巒峯相迫る間を進めば三里にして榛名山村に達する。

倉田道　高崎市より吾妻郡長野原町に通ずる烏川沿岸の縣道を七里にして倉田村に達する。村は榛名山の背面で西に鼻曲山、淺間山等連亘し、烏川の深き谿谷に位する。大字大澤より登れば一里餘にして八本松に於て室田道と合する。又字大澤より正東に向て登り杖の神峠を越え、鬢櫛嶽の南を過ぎて榛名湖畔に達する三里の道

がある。長野原町大字小倉より大澤まで八里。

吾妻道　吾妻川五町田の渡より伊香保町に通ずる二里半の道がある。東村大字柏原より沼尾川の西岸を登る一道は、廣場村で之と交叉する。交叉點より川に沿ひ、五町登つて大瀧あり、珠簾の瀧とも云ひ高さ一丈二尺、奇巖突出し瀧は二折して落ちる。更に上流十數町の處に一大瀑懸る。辨天瀧とて高さ三丈二尺、大小二條に分れて奔下する。瀧の上にて川を越え更に進めば三十町にして伊香保町に達する。尙ほも川に沿ふて行けば榛名富士の完全に三角形を成せるを仰ぎつゝ、烏帽子嶽の東を過ぎ一里にして榛名湖畔に達し、西岸を十數町廻つて天神峠の下に出る。此の外に山の北麓より登るものには、吾妻川岸の金島村大字金井より二里二十町にて伊香保に達し、吾妻郡原町より吾妻川を渡り、溪流に沿ふて登ること四里にして鬢櫛山と掃部嶽との間を過ぎ、硯岩の東にて湖畔に達する。

三　高山植物

榛名山の高山植物はさまで豐富ではないが、山に登攀の苦痛少く容易に採集し得るが故に、散策の折節之を試むるも亦一興であらう。伊香保神社附近相馬山麓榛名湖畔榛名神社附近等に於て、縱に之を摘んで歸ることが出來る。

石松科　ヒカゲノカツラ

百合科　シヤウジヤウバカマ△ネバリノギラン△チゴユリ△マイヅルサウ△ウバユリ

蘭科　アツモリサウ△クマガイサウ

金栗蘭科　フタリシヅカ

樺木科　クマシデ

蕁麻科　ムカゴミヅ

毛茛科　ミツバシヤウマ△サラシナシヤウマ△レンゲシヤウマ△ヤマシヤクヤク△レイジンサウ

罌粟科　ミヤマエンゴサク

茅膏菜科　モウセンゴケ

虎耳草科　バイカウツギ△ミツバウツギ△ギンガサウ△ダイモンヂサウ△ウメバチサウ

薔薇科　ダイコンサウ

槭樹科　チドリノキ

亞麻科　マツバニンジン

荳科　タヌキマメ

柳葉菜科　ヤナギラン

繖形科　ノダケ

鹿蹄草科 ギンリヨウサウ
石南科 クサレダマ
木犀科 コバト子リコ
紫草科 タチカメバサウ
蘿藦科 ロクオンサウ△ツルガシハ
唇形科 カメバヒキオコン
玄参科 クガイサウ
苦苣苔科 イワタバコ
敗醬科 ハクサンオミナヘシ
山蘿蔔科 マツムシサウ
桔梗科 シデシヤジン△ソバナ
菊科 カシハバハグマ

水龍骨科 シシガシラ△シノブ
苦懲科 ウチワゴケ△コケシノブ

第八章　角落火山

一　總說

角落火山は榛名山と淺間山との中間に在つて、東半は碓氷郡に跨り、西北片は吾妻郡に置き、而して西南角は信州北佐久郡を踏まへる。

この山は消火山にして角落山（海拔一千三百九十六米）鼻曲山（一千六百五十四米）との間が舊火口底と思はれる。支峰には鼻曲山の南に一ノ字山（一千四百卅三米）東南に霧積山（一千百七米）あり、北に矢筈山（一千四百六十七米）淺間隱山（一千七百五十六米）脈を引き、西に丘陵突起して上信の境を劃す、角落山との中間稍や東南に偏して劍ノ峰（一千四百廿九米）が聳える。碓氷嶺は一ノ字山の南方に連るものである。烏川は舊火口より發し、水源は烏石とて黑色にして烏嘴に似た形狀の岩石の間にある。而して角落山の麓を廻りて榛名山との間を割き、東南に向つて流れてその南麓を過ぎる。霧積山より發する霧積川は、鼻曲山と一の字山との間に發し、水源より遠からずして雌瀧雄瀧を作るものを合せ、東南方に溪谷を穿ち横川の南に於て碓氷川に注ぐ。又相間川は角落山の東方に發し榛名山の東南方に於て烏川に會する。

二　登山路

坂本町は碓氷峠の第一號隧道入口のほとり國道を右に折れ、霧積川に沿ふて上る路は頗る險難であるが沿道の山光水色は畵の如くに美しい。瀧を見るには湯泉澤より西の山中に分入ること凡そ一里、地藏岩の南に玉簾を懸くるもの高さ百尺幅十三尺、之を雄瀧と云ひ、その上流に白絹を垂る、もの高さ六十尺幅十尺、これを雌瀧と云ふ。湯泉澤より更に進んで川を渡り、崎嶇險難の山徑を攀づること三里、鼻曲山に霧積溫泉がある。泉質鹽類泉で昔は相應に榮えたが今は甚だ寂びれてゐる。

碓氷峠熊野神社附近より雌瀧の上流を過ぎて至るものと、烏川水源附近より角落山の西方を辿つて登るものとがあるが、草徑纔に通ずるに止る。山頂に達するは容易でないが、上武甲信越四國の高峻を望見し、淺間榛名妙義白根すべて叫ばゞ應へんとし、眼目壯豁無比である。

第四圖　輕井澤より見たる淺間山

第九章　淺間山

一　總説

北は上野南は信濃に跨る淺間山は、上毛に於ける唯一の活火山である。まことにその噴煙は千二三百年前より一日とて絶ゆることはない。火山脈は之を西方角落火山より受け東南荒船山に傳へる。日本山岳築造史中殊に重要の位置を占むと云はれてゐる。海拔二千五百四十二米。高さに於ても東境日光白根と比肩するに足る。

山容は略圓錐形を成してゐる。頂上なる現火口は長楕圓形を成して東西に長く南北に短く直徑三百米餘り、東南の火口壁と東北の火口壁と兩地點相對して最高点を作つてゐる。不斷に蒸氣亞硫酸瓦斯を噴出する。現火口の西方に二重の弓狀岩壁があるが、後なるは牙山と云ひ最舊火口壁の殘骸、前なるは前掛山と云ひ舊火口壁の

一部である。支峰には南に石尊山(一千六百六十五米)西南に劍ヶ峰(二千二百八十米)西に淺間黑斑山を起し、東方小淺間山(一千六百五十五米)は寄生火山である。

火口の内部の觀察に就いては大平晟氏の「富士淺間登山紀行」に甚だ詳かなるものがあるので、拔いて茲に掲ぐることゝした。

「現火口を距ること十數間の處に於て灰上に簀座し休憩すること十數分、忽ち轟然たる地下の鳴動と共に黑烟噴口より上騰し。數秒にして豆大の砂礫降り來りて笠殆んど破れんとし、大豆大の砂礫は漸次小豆大となり、粟大となり遂に細灰の密降となれり。此意外なる制烈の噴狀に逢ひ、衆皆な愕然慄然たり、同座中倉皇蹶起逃げ去るあり、他も亦之に倣ひ、三人五人去れり、匐へり。蓋し本山は當時に於ても中腹に至れば、轟々たる噴聲を聞き、濃烟幾條天を衝き昇る。故に氣弱きものは既に膽を奪はる。疑心暗鬼どころか悚心活地獄に接す。能く探險するもの尠し、殊に硫氣瀰漫咽喉を刺激し、咳嗽を發する。後聞けば當時の劇噴こそ予に取りては意外

の仕合せなれ。本山は平時噴勢に多少の强弱あり、從つて騰煙も變るものあれど、噴氣常に立ち籠めて火口に近づくこと難く、强いて近づくあるも、烟色の爲に火口底を窺ひ視るべからず。然るに此劇噴數十分の後は珍らしく靜穩となり、且つ此日は幸に風伯亦休息し、少量なる烟は直眞に立ち昇りしを以て、火口緣を左より一周して安全の處を撰び、被灰を拂ひ緣壁岩角を碎き取りて紀念物となし、口底を視得る便宜の突角に簀座し、火山活動の眞味を探るべく待ち構へたり。騰煙は益々減少稀薄となり、窅渺の中微に其口底たるかを認め得るが如し。乃ち雙眼鏡を以つて之を窺ふに果して底部なり。之を熟視するに底部は猶富士火口底部の如く、漸次口壁壞墜の爲塞がりし如く、底中更に數多の噴氣孔を見る。其大なるもの西北隅に四孔弧列し、南に一大孔あり。各孔噴煙の色同じからず、西北隅の四孔中最西のものは白色、次は黑色、次は暗赭色、次は黄赭色にして、南の大孔は暗黑色とす。各孔の噴勢時に强弱あり、或は同時に或は異時に噴煙し、同一孔中よりの煙色、亦時に依

に多少の變更あり。噴騰せられし岩塊砂礫の墜下して孔上に至るや復た噴き騰げられ、騰りては墜ち墜ちては騰る、恰も湧泉の砂石を上下循環せしむる如く、口壁に反響して其音轟々然たり。其壯觀烈壯得て名狀すべからず。五個大噴孔の他小なる孔に至りては擧げて數ふべからず、或は底部に或は側壁に口緣に、時には足下不意に噴煙に遭ひ、一驚を喫する事なきにあらず。忽然として噴き忽然として止む。火山の奇、火山の美、亦極れりと謂つべし。口壁峻峭削るが如く或は往々鋏筬をなすあり、假令噴煙せざること富士の如くならしむるとも、到底降り得べからず。予試みに徑尺の岩石を投ぜしに加速動を以て墜下し、其衝突する所脆壁は粉碎し、硬壁には反撥せられ猛勢譬ふるに物なく、尺徑は忽ち寸徑となり分徑となり、未だ底部に達せずして視角既に微小となりて認むること能はず、想ふに富士火口に比すれば其深少くも五倍以上ならんか。」

二　登山路

淺間山に登攀するには、沓掛追分御代田小諸等數口ある。是等は皆な信州よりするものであるが、沓掛道は輕井澤より草津に至る道を、小淺間山の麓に於て左折するものである。

沓掛口　輕井澤より火口まで直徑僅に二里に過ぎぬが、屈折して電光形に登るために、行程五里以上に及ぶ。登山は夏日而も夜の深更に出發するを可としてゐる。と云ふのはその裾野甚だ廣闊、且つ木陰を得る事極めて困難であるのみでなく、草原盡くれば噴石焦砂の上を歩行せなければならぬからである。途中飲料水を得ること絶無なれば、必ずその用意を忘れてはならぬ。輕井澤より草津道を西方に一里にして沓掛に至る。右に折れて東北に向ひ裾野を辿る。深さ時に十數尺に達する輕石層は天明三年の大噴火の遺物である。淺間越の坂路を上れば小淺間山の麓である。

沓掛より一里半、草津道を捨てゝ左折し數町の間は針葉樹林である。漸くにして大淺間山下の「馬返し」に達し數町進めば山路益々急峻となり、傾斜時に六十度に及ぶ。道はすべて霏爛せる沙土と浮石とであるから、ともすれば足は捉はれて辷る。右に曲つて山側を巡ぐれば稍や平地に出る。此處が絶頂で四圍の山壁は火山灰砂の層狀を成してをる。噴火口迄でには小丘横り、小丘は微細の火山灰より成り安山岩の大塊を布く。丘の半腹に至れば遠雷の如き音響耳に入り、丘上に立てば硫煙鼻を衝く。この山雲霧の變化甚しく清朗の日は稀れであるが、噴煙の激しい時には風も硫黄の氣を乘せ、咽喉を刺激し、咳嗽を發し殆ど呼吸困難となる。煙の勢強き時は地に伏して避け、その薄くなるを待たねばならぬ。頂上に近づけば路の傍の小孔より煙を吐くのを見手を觸るれば微溫を感ずるのである。火山壁絶頂に立つて望めば南に甲斐全國の山岳重疊を作り富士は益々麗らかに南西に八ヶ嶽の圓錐形を伏せ、之に連る日本アルプスの波濤は壯重崇高稍や北して越後越中の高峰攢立し、吾妻利根の諸峯累々たるを見、榛名赤城妙義の三名山は各其の特色を現はし、東南には大平原を煙波漂渺の裡に俯瞰する。而して己が山麓を見れば青赤三池の色を見るも奇しく、日本の中心に連亘する山脈の偉觀は、この頂上の天より與られたる賜物である。

追分道　追分は輕井澤驛と御代田驛の中間に當り、沓掛より西方一里餘。此處より北へ雜草茂る追分原の小徑一里餘登ると赤瀧(血の瀧)がある。這は山の南麓血の池の下流にして高さ三丈幅一丈。水の赭赤色を帶びてゐるのは、血の池の水鐵分を多量に含有する浮石を分解して染めたからである。その傍に八疊敷程の巖洞あり口狹く奥は廣がつてゐる。瀧の前を近く横切りて崖壁を攀ぢ十數町にして二個の血の池道を挾むを見る、その間隔數十間、池水は赤瀧よりも更に深赤色を呈してゐる。赤瀧には他の溪流が混入するからである。更に十間許りにして青池がある。徑凡そ十五間程にして稍や長圓形を成し、水色は硫酸鐵を溶解して藍青を帶びる。路漸く

嶮となり、山の隅角を行くに、落葉松の古木の樹幹矮縮して葉短く、高さ僅に二尺にして皮鱗岩塊の如く數十百年の壽命を保つものがある。中腹以上は樹木なく、火山砂礫の中に矮生虎枝散点してゐる。愈々登れば砂礫道に厚く足は甚だ辷り易く道は嶮を極め、前掛山の熔岩崩壞墜落して巨岩占居してゐる。傾斜は絶頂近くに至つてや、緩かになるが、岩塊大となりて火山灰之を蔽ふてゐる。

吾妻道　草津溫泉から輕井澤まで十里。道は南北に對峙する淺間本白根兩山の裾野が頗る濶大な高原を成した、所謂六里ヶ原を横斷するのである。長野原町に於て草津道と鳥居峠と岐る、所より十數町峠道を行けば、吾妻川を渡る一路がある。この路を進むこと二里半にして長野原町大字應桑村の吾妻牧場に達する、牧場の面積三千町歩、この邊りの風光は眼路はるかなる高原に馬匹の群れ牧草の香高くしてさながら異國に遊ぶの心地する。路は次第に淺間の麓に近く、一里餘にして分去の茶屋がある。地は海拔一千三百二十三米。更に二十餘町登れば小淺間山の麓淺間越に

達する。右に折れて進めば淺間山の頂上に至ること、「沓掛道」條下に説いた如くである。

三　高山植物

この山の裾野は頗る高山植物に富み、低地に發見し得ざる美麗なる草花咲き亂れ異香芳烈、過ぎ行く旅人を惱殺せざれば已まぬ。

石松科　コスギラン△マンネンスギ△ヒカゲノカヅラ
禾本科　カリヤスモドキ
百合科　キミカゲサウ△ツバメオモト
蘭科　アツモリサウ△ハクサンチドリ
楊柳科　チシマヤナギ
樺木科　ウダイカンバ△シラカンバ△ミヤマハンノキ

蓼科　オンタデ△アキノミチヤナギ

毛茛科　サンリンサウ△サラシナシヤウマ△ヒメイチゲサウ

十字科　ベニバナハタザチ△マルバコンロンサウ

虎耳草科　ウメバチサウ

薔薇科　ミヤマカグラ△ナンキンナナカマド

岩高蘭科　ガンコウラン

菫菜科　ゲンジスミレ△キバナノコマノツメ

金糸桃科　ミヤマオトギク

荳科　シヤヂクサウ

牻牛兒科　グンナイフウロ△イブキフウロ

山茱萸科　ゴゼンタチバナ

鹿蹄草科　ベニバナイチヤクサウ

石南科　ツガザクラ△コメバツガザクラ△クロマメノキ△シラタマノキ△アカモノ△コケモモ△イハヒゲ△ミツバツツジ△ヒカゲツツジ△ハコツツジ△コメツツジ△シヤクナゲ

岩梅科　イワカガミ△コイワカガミ

龍膽科　オホヤマリンダウ

唇形科　ラシヤウモンカヅラ△イブキジヤコウサウ

玄参科　クガイサウ△ミヤマイワガタサウ△ヒキヨモギ

忍冬科　ウグヒスカグラ

櫻草科　ツマトリサウ

敗醬科　ハクサンチミナヘシ

山蘿蔔科　マツムシサウ

桔梗科　サワギキヨウ△フクシマシヤジン△ヒメシヤジン

菊　科　イワインチン
水龍骨科　シシガシラ
金虎尾科　キバナノカハラマツバ
土馬騌科　セイタカスギゴケ

四　噴火史

本邦火山中、その噴火の頻繁なりしもの未だ肥後の阿蘇山を凌駕するはない。淺間山は實に阿蘇山に亞ぐものである。千三百年前より今日に至るまで、その噴火せしこと枚擧に遑なく、四近の國土に大慘害を及ぼしたること一二に止まらぬ。時に黑煙を天に吐いて土民を威嚇し、時に鳴動を發して之を戰慄せしめたこともそも幾千度なりしか、玆には比較的その激甚なりしものを年代に從つて叙するのである。初めて爆發したのは白鳳十四年（紀元一千三百四十五年）三月である。その時は降

灰あり山麓の草木は皆な枯れた。天仁元年（一千七百六十三年）七月には砂礫を降らし田園爲めに埋沒し、震動の音は諸國に響き聞えた。天治元年（一千七百八十四年）又噴火し、大永七年（二千百八十七年）四月、京祿元年（二千百八十八年）、同四年十一月二十日、天文元年（二千百五十二年）と連年噴火あり、慶長元年（二千二百五十六年）七月八日には近國に石を降らして多數の人畜を傷け、翌二年三月一日には雨の如くに砂石を降らし、同十年には十一月に始まり十二月に至つて熄んだ。

正保元年（二千三百四年）正月十三日、同二年正月二十三日、同四年正月十四日、慶安元年（二千三百八年）、同二年七月、同四年二月廿二日、承應元年（二千三百十二年）三月四日、明暦元年（二千三百十五年）十月廿一日、同三年、万治元年（二千三百十八年）六月廿四日、同二年六月五日、同三年二月廿一日、寛文元年（二千三百廿一年）三月五日及八月廿六日、同九年と相續いて頻りに噴火し、後暫く平穩であつたが、元祿十六年（二千三百六十三年）よりは寳永元年（二千三百六十四年）正月一日

同三年十月十六日、同五年十一月十一日、同七年三月十五日、正德元年（二千三百七十一年）と隔年若くは連年噴火し、四年間休息の後享保元年（二千三百七十七年）八月十九日、同三年九月二日、同五年五月一日、同六年五月二十八日、同八年正月一日及び五月一日、同十三年十月九日、同十四年十月、同十七年六月九日、同十年六月二十日と連續し、後二十餘年を隔てゝ寶暦四年（二千四百十四年）五月に噴火した。

天明三年（二千四百四十三年）七月七日の大噴火は有名なものである。之と同時に草津白根も爆發したのでその慘狀想像に餘りある。この年春既に噴煙常に倍するを認められた。六月廿九日よりは殊に甚しくなつて、黑煙の間に電光の如く閃くのが見えた。七月三四日よりは震動頻りに起つて雷の如き響あり、雨の如く砂石降り日を追ふて甚しくなつた。七日の朝に至るや鳴動頗る激しく岩石乱れ落ち、黑煙天に漲りて晝も尙ほ暗きを覺えた。而して途に大爆發をなし次で草津白根も噴火し烈火は炎々と天に冲した。翌八日未の刻熱湯夥しく湧出して山下の田野は忽ち大河と化し、附近三十五村約四千戸は悉く熱泥の底となり、三万數千の人命と無數の牛馬とは皆なその犧牲となり、慘鼻眼も當てられなかつた。現時淺間山麓に累々たる岩石はその噴火の遺物である。

明治となつては二年の夏を最初とし二十二年十二月廿四日、二十七年四月十一日に鳴動噴火し、三十二年六月九日大鳴動あり、同年八月七日には鳴動して灰を降らし、三十三年一月二十一日夜には燒砂灰等を降らし、同年二月七日には鳴動し、同月十九日には鳴動四回に及び三月三十一日にも鳴動した。三十三年三月十七日及び同月二十四日に大鳴動をなし、後四十二年に至るまでは極めて無事平穩であつた。

四十二年九月廿五日は終日火煙熾にして午前七時頃火煙を噴出し、十一月廿五日には大小二回の鳴動を起して灰を降らした。十一月三十日には午前八時四十五分微震をさへ起して二回鳴動し十二月七日には大音響を發し降灰があつた。四十三年には四月二十四日鳴動あり、十月廿一日大震動を起し、十一月十日に次いで十二月中

には五日鳴動し一日に二回のこと二日あつた。

四十四年より大正三年迄での間は頗る異常を呈してゐた。即ち四十四年一月中には大鳴動を起したる日五日ある。二月八日には午前十時頃より絶えず繼續鳴動して夜半に及び、時々地震を起した。三月十六日には夜半に至る迄で時々鳴動し、尙ほ同月中二日四月中四日鳴動し一日二回のもの二日あつた。五月八日には午後三時二十分頃遠雷の如き音響を發し、次第に高まつて遂に家屋を振動せしめ後三十分過ぎて、未だ聞きたることなきパチンと云ふ大音響を發し餘勢一分も續いた。十二月三日にも鳴動降灰があつた。

大正元年十月二日の鳴動の際には山麓に地震起り、十二月十四日の鳴動には追分地方に石を降らし、輕井澤では家屋の振動甚しく家人は皆な戶外に飛出た。二年になりては三月中一日四月中二日五月中三日鳴動し、遂に六月十七日午後九時五十分爆發して烈しき鳴動十數秒續き、山頂の中央より北方に當り圓形の火を噴いた。六月二十日午後四時頃にはカーンと云ふ近來になき大音響を發した。同月廿三日には六日も鳴動し、尙ほ同月中二日、七月中四日、八月九月各一日、十月中三日の鳴動あり、十一月二日午後九時三十分には火の柱二三尺現れ、越えて六日午前火談が騰つた。尙ほ同月中一日十二月中二日の鳴動があつてその年も終つた。

三年には一月中三日、二月中四日、三月中六日、四月中二日、五月中二日、十一月十二月各一日の鳴動あり、一月廿八日の如きは一日八回に及んだ。而して翌四年は至極安穩に過ぎた。

第十章　地藏峠

草津溫泉より信越線田中驛に至る十二里の道は淺間山の西方に通じ、その國境上の峠を地藏峠と云ふ。海拔千七百三十三米。峠の東に籠の登山(二千二百二十三米)三方ヶ峯(二千四十米)並び、西に湯ノ丸山(二千百五米)烏帽子岳(二千六十五米)また竝ぶ。

峠の名は附近の水涸れたる磧に立つ數多の地藏の形した石に因んだものと云ふ。籠の登山三方ヶ峯に登る道と、烏帽子岳湯ノ丸山に登る道とが峠より岐れる。その何れの頂上に立つても峥嶸天を摩す日本アルプスの大山彙を望見し、南西に群峯をしろしめす富士はいよ〳〵高雅淸爽、淺間の噴煙は東より我を蔽ふかと疑はれる。

峠より北へ二十町にして鹿澤溫泉がある。桟敷山(一千九百十五米)と小在池山(一千九百八十米)と湯ノ丸山との麓の接觸線上に在つて、海拔一千五百三十五米。また山の湯とも呼ばれ泉質炭酸泉にして溫度百十六度、胃病神經痛リヨマチス婦人血の道等を治するによしと云ふ。溫泉宿六戸。四圍高山を以て繞らし、八月の盛夏にも尙ほ氣溫華氏七十五度を越えたることなく、山間殘雪を見、風光頗る明媚の遠く俗界を離れた仙境である。

東方桟敷山は紅葉殊に美しく、西南方湯の丸山は全山青草を以て蔽はれその裾野は牧場となる。西方小在池山の頂上には小池がある。東方半里の處に在る押出し河原は幅一里長二里の間に連り、淺間山大噴火の際噴出された熔岩である。

溫泉附近は高山植物に富んでゐるが、中にも光蘚は最も有名である。光蘚料に屬し雌雄異株にして丈け四五分葉は半透明である。一方よりのみ光線を受くる卑濕の洞穴內若しくは樹根下に生じ、胞子より發育せる前芽は絲狀又は球狀をなして中に葉綠粒を含み、その葉綠粒は日光の強度に應じて位置を變じ、洞穴內に於ては細胞底に集まり、強く光線を反射する時は鮮かな綠色光を放つて頗る美麗である。然し

雨水に遭へば忽ち枯死する。

長野原町より鳥居峠道を吾妻川に沿ふて四里進み、嬬戀橋を渡つて大笹村を過ぎ一里餘にして田代村に入り道を左に折れて、温泉より流れ來る湯尻川の谿を登れば一里半にして温泉に達する。又信越線田中驛に下車し地藏峠を越え行けば四里半車馬の便がある。

第十一章　碓氷峠

隧道と紅葉とを以つて著名な碓氷峠は、淺間山の東南淺間火山群の褶曲最も複雜を極めた、上信の國境上に在つて中仙道は此峠を東西に過ぎる。坂本町より新舊二道あつて、新舊の峠は高さ九百五十六米、舊道の峠は高さ千二百三米。隧道は新道にあり、紅葉は舊道の獨占する所である。

坂本町より舊道の絕頂迄で二里、路は險阻にして登るに容易ではないが、寧ろ輕井澤より舊輕井澤を過ぎて峠を越え、坂本に歸る方が容易である。

碓氷の紅葉とは輕井澤を去る約半里の處より、横川驛の手前一里ほどのところ迄で凡そ三里の間を云ふのである。輕井澤驛より淺間山をば目蒐けて十餘町北に行くと舊輕井澤に出る。坂路二十五町餘を登れば絕頂にして、熊野神社あり社東が即ち上信の國境で、社を距る十數町の處に、日本武尊が弟橘姬を追慕して倚り給ひしと

云ふ巨石を存し、思婦石の三字を刻んである。妙義山は脚下にその怪奇の峯を立て大町桂月氏が「山岳の百鬼夜行」と評したのも、實にもと肯かれる。碓氷川を隔てゝ榛名山との對峙も雄大に、西に淺間山は豪壯、立科八ヶ嶽も指すべく、眺望の勝れたる關東第一の峠と云はれ、殊に妙義遠望の妙味は此處を以て極まれりとする。

秋は紅葉、絶頂より杉樹と薄と青白綴つた中を下ること半里許りにして紅林に入る。滿山錦繡を織りなしてその美觀筆舌の克く寫し得る所ではない。峯巒の間を炎を負ひ炎の中を下れば、新道と合し坂本町に達する。

第五圖　妙義山第一石門

第十二章　妙義山

一　總說

淺間火山群も淺間山以南は漸く低下して高峻なるもの甚だ稀となり、荒船山の一千四百餘米も尙ほ克く覇を稱するに足る。一千百三米の妙義山はその高距に於て荒船の敵ではないが、その裸々たる山骨の奇を盡し怪を極めた光景に至つては、ひとり上毛に於てのみならず正に天下に獨歩するものである。

妙義山は谷急山(一千百六十二米)矢崎山(一千百八十四米)と連鎖して碓氷峠に結び、鏑碓氷兩川の溪谷に依つて南北を限らる。この山彙は一中心より幾多の山脈鋸齒狀をなして放散したもので、北に白雲山(一千百三米)東南に金雞山（八百五十六米)西に金洞山(一千百四米)あり、金洞山は東方より望む時は金雞白雲兩山の中間に

見えるので一に中の岳と呼び、白雲金洞金雞を妙義の三峯と云ふ。相馬嶽は白雲山の最高峯である。本山は舊火山にして板狀又は柱狀節理を呈する集塊熔岩が激烈なる雨水雪の浸蝕を被つた結果、今日の如き種々なる奇岩石門を產み出したもの、神工鬼斧と驚嘆するも、そはすべて絶大なる自然力に外ならぬのである。

妙義山の風景の眞髓はその秀峭その奇趣である。全山これ平凡を超絶し巖あれば形狀必ず怪、峯あれば登攀必ず險、路傍に橫る石塊にも亦妙工の加へられたあるかと思ふばかりにして、げにも火山の化物屋敷である。

二　登山路

妙義神社　信越線松井田驛(高崎驛より十五哩)に下車して碓氷川を越え、一里に稍や遠き妙義町を志す。道は白雲山の裾野の爪先上り、坂路盡きて黒門立ち、蕭條たる町は山に據り層々と連つてゐる。町の高き處に至れば碓氷の溪谷は脚下に流る

ゝが如く、北上州の連山は赤城山之を抑へ、吾妻の群峰は榛名山之を負ひ、赤城と秩父山脈との間には遙かに筑波山の大平原を鎭むるあり、展望頗る壯大である。見上ぐる白雲山は甚だ險峻、猿も登らぬ巖が根に、樹幹危うく枝を張る。尾花坂を西町許り路を眞直ぐに登つた所に妙義神社がある。日本武尊を祀れるもの、宣化帝二年の鎭座と云ふ。天に架したる如き石段を登り仁王門隨身門唐門を潜れば、神殿幣殿拜殿饌殿神樂殿等金碧燦然眼を奪ふばかりである。

白雲山　祠の右手なる山中に入りて奥の院道を登る。杉栃樅など森立して晝尙ほ暗き中に小徑あり。附近の鶯の瀧日暮の瀧皆の清水獅子巖船石等皆な音に聞えたものである。十五町にして大字巖に達する。危巖の頂上に穴を穿ち、杭三本を立てゝ竹を編み、之に咒符其他の紙片を結び付けて「大」の字を現はし、これは遠く中仙道よりも望見することができる。此巖上に登れば四顧の景極めて佳く、碓氷の溪谷赤城榛名以北の山峰と以南の大平原とはすべて眼界に入る。又妙義の紅葉を賞するに

は此處に若くものはない、天狗評定所の平地を過ぎ、大木の僵れたるを踏みつゝ登り右に折れ絶壁を仰ぎつゝ石級を上れば一大巖窟内に奥の院あり、中に大黒天石像を安んずる。神社より此處まで廿五町。白雲山の絶頂には更に二十五町ある。院側の絶壁を樹枝を捉へ木の根を踏まへ、鳩胸胎内潜り四逗等の難險を冒して攀る。溪を隔てゝ相馬ヶ嶽皷ヶ嶽(天狗嶽)峭立し、淺間の偉峰は白根の峻岳と對し筑波の双鬟も原頭に見え、絶頂の眺望甚だ壯大である。奥の院に歸る他の一路がある。三大巖脊を並べた大矢筈に下り屏風岩の下を傳ひ、逆戻り犬もどしの大險を後向きとなりて這ひ下れば釋迦嶽の前に出で、龍立の巖洞を右に見つゝ進めば大字巖の上方にて奥の院道に合する。白雲山の東北麓をめぐつて裏山に至り、陣場ヶ原を過ぎ雜木草蔓を踏み分けつゝ行けば、石門人形石鋏石出牘の瀧その他の奇勝少なからず、金洞山にも劣らぬものがある。

相馬嶽 白雲山の絶頂より峰の脊を傳ひ行くと天狗嶽の頂上に達する、他の諸山

よりも廣くして石祠あり、眼界も白雲山より稍や廣濶である。天狗嶽より南へ下つて、一旦天狗嶽と相馬嶽との間に至り、全く路はないが危岩を攀ぢて相馬嶽の絶頂に達すれば、白雲山中の最高峰として展望最も濶大豪壯、正に妙義諸峰中第一に推されねばならぬ。

金洞山 妙義神社前をを左折して十町程行き、杉林盡きて赤坂に出で、此處に於て初て金雞の全体を望む。四五町にして小澤氏の葡萄園がある。此處より見れば白雲山を形成する本山は右に相馬ヶ嶽は左に、中なる石峰は天狗嶽である。その餘脈山腹に皷岩障子岩猩々岩等の奇形を起す。更に七曲りの坂を上れば、金雞山は筆頭岩子持岩兜岩大黒岩等の怪岩重り合へるが如くに見える。葡萄園より一里許り東麓表を過ぎ一本杉に達する。妙義三山裾を合せて峠を成すところ高さ七百三十八米。谷を隔てゝ金雞山の筆頭岩を望み、これと對するものに燈籠岩惠比壽岩東仙人の窟等皆な奇々怪々、遠くは赤城日光の諸山、近くは黒瀧荒船より甲武信の群峰一一指

呼し得る。妙義の妙義たる所以の佳境は此の一本杉より始まるのである。

石門　一本杉より岐路を右に進めば燈籠岩伸立岩屏風岩等愈々出でゝ益々奇、屏風岩の腰を上つて行くと菅公の硯水あり、幅三尺ばかりの手洗鉢形の穴に水の湛つたものである。屏風岩をめぐつて左に曲れば第一石門に達する。岩の形も穴の形も架燈口の如く、巖は高さ十五丈幅十二丈，穴口高さ九丈幅八丈、是れ鬼神の工になるかと驚嘆するのみである。大蠟燭岩小蠟燭岩皷岩禊岩鏡石等奇態横生するを見つゝ上ること十町にして第二石門がある。穴は巖の一方に偏して上廣く下狹く三日月に似て高さ四丈幅一丈、險は却つて前者に勝つてをる。大蠟燭岩小蠟燭岩虛無僧岩禊岩界岩幻岩皷岩等皆形怪く鬼氣谷に滿つる。此處より遠く第四石門武尊岩天狗臺等も望むことができる。第三石門は釣籠下り片手下りあごの難所を下り、少しく左に曲つた所に在る。穴は高さ八尺幅一丈二尺、嶂壁脚下に削り、前方谷を跳ばんと構へる如きものに獅子岩がある。少しく歩を回らして本道に出で右に行けば第四石

門に達する、穴は高さ八丈幅九丈三尺横の潤きこと四門中第一である。俯せば第一門第二門も指し得、仰げば右に金洞の三峰高く、左には天狗岩以下大砲岩動ぎ岩を見る。少しく下りて稍上れば武尊岩あり。以前の道に戻つて前進すれば、右に深溪崩るゝ所黒田の泣石小徑を埋め、鉄鎖に縋つて之をわたる。再び鉄鎖に依つて長巖に達し、幅一尺長四五尺の東山峽の橋を過ぎて天狗岩に登る。此處は稍や平坦にして小石門あり、岩を龜岩穴を胎内潜りと云ふ。尙ほ行けば動ぎ岩天狗の評定所がある。評定所の前方に鏡石横はる間の谷を金洞の東山と呼ぶ、山の奇はこゝに盡きるのである。天狗岩第四石門第一石門を東山の三景と云ひ、眺望最とも勝れたのは天狗岩、次が第四石門、第一石門最も劣る。

中の岳神社　再び前路に出で第一石門を過ぎ禊岩を見て進めば中の岳神社に達する、社務所前を過て大黒祠前を右折し、石段を登ると武尊の祠がある。朝日嶽の脈は延びて葛籠岩鞍掛岩法螺貝岩等を起し、葛籠岩と鞍掛岩との間より岩脈に上つて

右に行くと石祠がある。西山峽の橋と云ふ巖路を過ぎ髮剃岩を潛り、鉄梯と鉄鎖に縋りて行けば百々力岩に達する。朝日嶽の絶頂には遠からぬ二三坪の平地にして、金洞の主峰に面して左に西大黑岩葛籠岩仙人岩右に八丈岩大佛岩鳥越岩二見岩東大黑岩等を見る。葛籠岩を左にして下り八丈岩を右にして上り、鉄鎖に縋りて辛うじて中の嶽の絶頂に登る。

金雞山　金洞と金雞との間を行き峠を一つ越えると、金雞山の東麓御嶽神社の前に出で、少しく登つて二合目に出づれば、中澤駒吉とてこの山路を開いた祠官の銅像を見る。路は益々難險にして這ひ行かればならぬ。四合目には山を開いた僧の石像三笠山の平坦には不動尊がある。帆立岩を仰ぎつゝ上り蟹の横這ひに出で、急勾配の巖面を石瘤を踏まへて登る、馬の脊渡り頰剃り山峽の橋髯剃等の危路を經て絶頂に達する。白雲山を見るのみにして眺望さまで廣くはない。筆頭岩は山の一角に直立し、この絶頂からも行けるが頗る危く、寧ろ金洞山一本杉より左に下り新に發見し

た細徑を行けば數丁にして達する。

第十三章　荒船山

荒船山は北甘樂郡と信州南佐久郡との境界上に聳え。附近連山中の最高峰である其の海面を拔く高度一千四百二十二米。

著名なる熄火山にして、山頂に長さ十五町幅八町の長方形を成し、稍や南に傾いた高原がある。茫々たる草原で樹木なく岩石も赤露はれてをらぬ。その南東の隅に京塚と云ふ圓錐形の丘陵が突出してゐる。この高原のために山容屋宇の如く、又左右舳艫の形を現はし恰も泛舟の如き觀がある。

北甘樂郡下仁田町より南牧村に沿ふて四里半登り、磐戶大日向砥澤等の村落を過ぎ、尾澤村の村役場と學校の所在地大字羽澤を右に折れ、溪流の岸に連る難路を登り下星尾上星尾等の小村を過ぐると溪流に大瀑懸る。線ヶ瀧と云ひ高さは百八十尺に過ぎぬが幅は四十二尺に及び、蹙々と壯觀を極めてをる。路は直ちに荒船山の頂

上に向ひ、星尾峠（羽澤村より一里半）に至れば峰は右手に碧空を突く。更に草徑を尋ねて攀る。頂上に荒船山神社あり、建御名方命外一神を祀つたものである。南に甲信武の諸山雲際に起伏し、北は淺間山の噴煙天に冲し西を望めば千曲川は廣漠たる佐久高原を紆餘北走し、東を顧みれば群峰綿々碧を連ねる、中に妙義の奇峭いよいよ怪しく、展望の偉觀容易に求むべからざるものがある。

尙ほ本山の名をして高からしむるものは山腹の荒船風穴である。蠶種製造家庭屋靜太郎氏の經營するところ、日本五大風穴の一として上毛蠶業界の誇りと稱せられる。

第十四章　四阿山

淺間山麓六里ヶ原の西邊に齋整せる圓錐形を現はし、何れより見ても山頭恰も屋の棟の如き巨峰がある。四阿山（東屋山）の名はこの山形より起つたものである。又吾妻山吾嬬山に作る。上信兩州に跨り海拔二千三百三十三米。死火山にして山頂に火口が殘る。

中之條町より信州街道を行けば、國境に於て鳥居峠を登る。峠は海拔一千三百六十二米、四阿山の裾野とて傾斜は緩慢である。北に越後山系の連亘眞に畫けるが如く、斑尾山の圓錐形は殊に美しく、東西の高原はその盡くる所を知らず、豁如たる眼界である。

峠より北に危路を採る。一山を越え又一山を迎へ、山稜劍を立てた如くである。偃松帶を出で、地衣類の岩石に點綴するを見る。漸くにして四阿山の頂上に達すれば左右は數千仞の絕壁を削りて深谿黝然。頂上には東向西向の兩祠がある。東は菊理媛を祀り。上州祠と云ひ、西は伊弉册尊を祀り、信州祠と云ふ。即ち兩祠の中央が上信の界である。又祠を圍つて石堤を作り烈風を防いでゐる。背を缺すれば八ヶ嶽蓼科淺間戸隱黑姬妙高榛名等は云ふまでもなく、近隣十二州の高峻悉く双眸に入り豪壯殆ど比なく、正北峰巒開くる間に北海の青波を見出し、煙霞の裡に翠黛を引くは佐渡ヶ島である。

この山寒氣最も強く、富士山よりも酷烈であると云ふ。

第十五章　万座山

草津白根の西に屹立する高峰を万座山と云ふ海抜一千九百九十四米。万座温泉その中腹に湧いて泉量頗る多く、溢れ流れて万座川となり吾妻川に注ぐ。泉質硫黃泉にして胃病僂痲質斯皮膚病中風等に最も効能ありと云ふ。硫氣到る處に昇騰し、殺生河原と稱する箇所は、岩の間より數百條の硫氣濛々と騰り、恰も林立の煙突煙を吐くが如く、爲めに全山草木を見ることができぬ。温泉は甚だ高地に在ると、四邊山を以つて圍まれてあるので、湯治場としてのみならず、又避暑地として近來大に世に知られて來た。

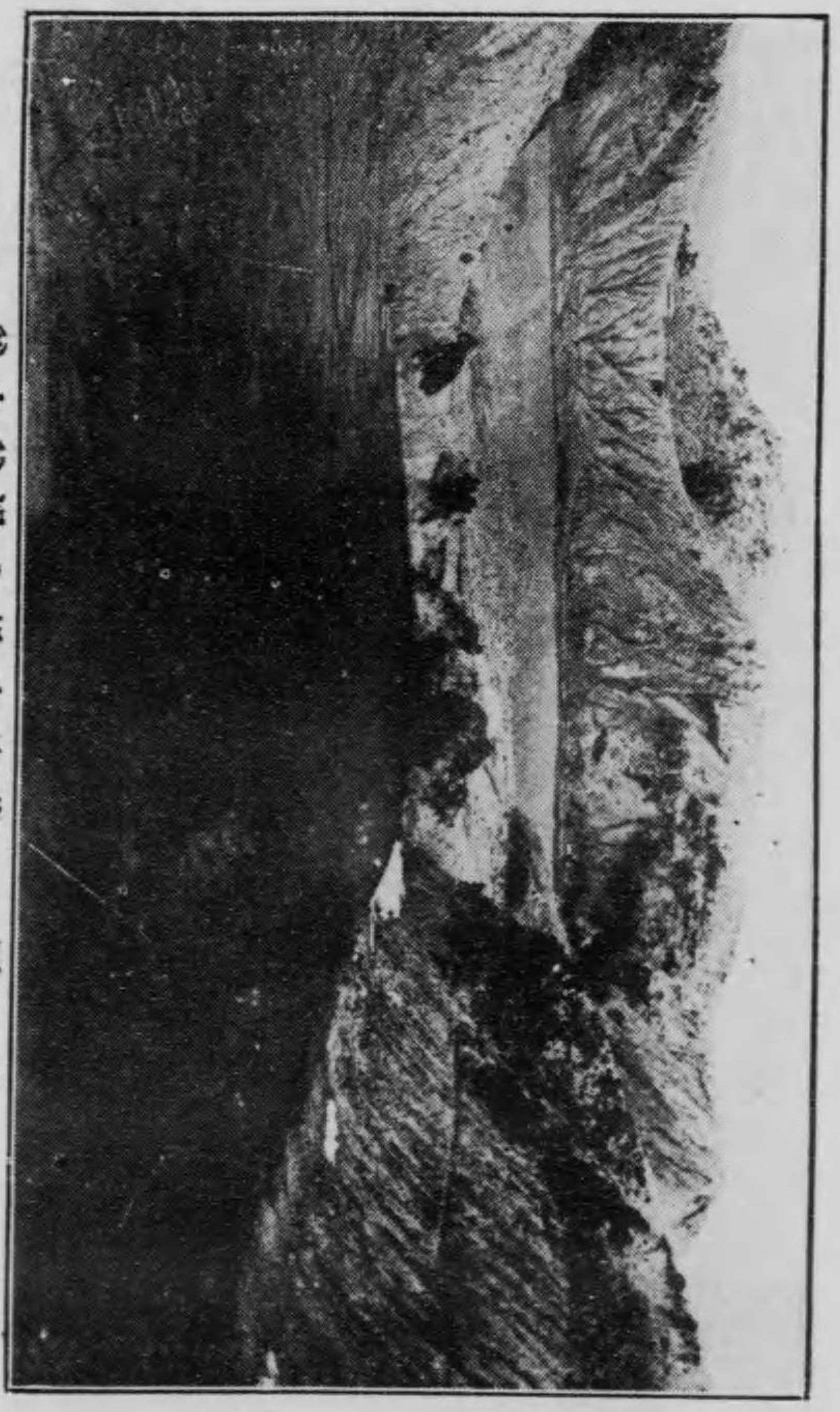
長野原町より信州街道を行くこと三里半。路を右に折れ北に來つて吾妻川に入る万座川の東岸を傳はり、千山重疊する處に辛うじて通ずる徑を求めて登れば五里にして温泉に達する。又別路は草津温泉より通じ、その里程四里。町より澁峠道を登り芳ヶ平にて左に入り、白根山の頂上舊火口の南縁を廻つて西に出で、十數町の坂路を下れば即ち温泉である。

第十六章　白根山(草津)

一 總說

白根火山群の霸者、吾妻諸山の盟主、海拔二千百六十二米の高峰白根山は郡の西北境に天を摩して峙立する。之を白光火山群の白根山と區別するために彼を日光白根と云ふに對し之を草津白根と呼ぶ。

この山は近年屢々噴火し、頂上の火口四個は現に池となつてゐる。三個並列するもの、中央を湯釜西を涸釜東を水釜と云ふ。湯釜は周圍十數町直徑は三町岸は熔岩を疊んで絕壁をなしてゐる。東半には酸性の熱湯を湛えて常に水蒸氣を發し、溫度攝氏百二十度位に達する。多く靜平であるが時として熱湯數十尺を噴き上ぐることあり、時としては湯の涸れ泥土岩屑を以て火口底を充すことがある。而して西半水



第六圖　草津白根の湯釜水釜

なき所には硫黄を混ずる泥土岩屑を堆積し、數ヶ所より瓦斯を噴出する。時に湖水上燐火の如く黄紫の燄を見ることがある。水釜は道路狀の障壁を以て湯釜の西方に接し、周圍三四町、湯釜とは反して水質頗る冷かに水色暗綠色を帶び水底を透見して硫黄の沈澱するを認める。涸釜には水を湛えぬ。又三池の南にやゝ離れて弓池がある新しき噴火口にして周圍十町。

史を按ずるに天明三年七月七日淺間山と同時に噴火し山麓を湯の海と化せしめたことがある。後漸く噴煙を絶ち、遂に冷却して火口に水を湛え、裸々たる山膚も年毎に綠樹青草もて纏ひ、建築用材を產出するまでに繁茂するに至つたが、明治十五年八月廿六日午後一時頃俄然爆發噴火し、硫氣飛散山石崩壞した爲に草木一時に枯死し、再び荒凉たる昔に歸つた、同廿二年一月二十二日噴火して近傍に砂石を飛ばし、同三十年七月三十一日鳴動噴火して、四十貫餘の大石を五百間許りの處に飛ばし泥土を南方約五里の處まで噴出した。三十二年八月七日噴火降灰し、最後に三十

五年七月十六日より活動し始め、九月五日夕爆發して弓池の傍に新火口を生じ小圓錐丘を作つた。其時万座溫泉の近傍には積灰一寸に及んだと云ふ。

東南二千米餘に位する本白根山も火山にして頂上に火口の跡がある。火口壁は東西高く北方低く、最高點は二千百七十六米に達する。火口は淺くその底に雨水を湛え附近は樹木密生してゐる。この山の形狀は扁平なる圓錐形を現はす。

二　登山路

草津溫泉　長野原町（中之條町よりは七里十三町）に於て吾妻川と長野街道とに別れ、北に登る道は稍や急峻である。二里にして峠の一軒茶屋に達する。稍や下りて運動茶屋あり、暮坂峠を越えて澤渡溫泉に至る道は、此處より東へ岐れて溫泉まで五里。急坂となり下ると忽ち草津町に入る。海拔千百餘米の高地に在つて西に白根山を負ひ、山の裾野は方一里に餘り、春は躑躅石楠花殊に美しく秋は野草皆な花を

付ける。本白根山万座山池の嶺浦島山岩寥山等天然の屏風を廻らしてゐる。暮坂峠の彼方には赤城榛名も指し、南方遙かに淺間山の雄姿を望む。溫泉は浴舍四十餘戸湯の數十二、泉質酸性にして多量の硫黃分を含み熱度頗る高く、之が爲め時間湯の奇習がある。皮膚病に靈妙な効能ありと云ふ。附近の名所を擧ぐるなれば、西の河原には溫泉處々に湧出して川をなし、乱立する岩石は硫化して畸形を現し、氷谷には盛暑の頃にも積雪を殘す。硫氣噴出する地獄谷にては草樹寒中も實を結び、禽獸之を啄まんとする時は硫氣の爲めに忽ち窒息すると云ふ。瀧には澁峠の途上高さ百二十尺二段となつて落下する常布の瀧を始め、嫗仙小仙霜間山箭澤唐詩北仙南仙狹藤獨石溫井小倉長篠王子翁澤等皆な探るべきものである。

登山　草津より北西に澁峠道を登る。高原一里の間はだら〳〵と緩かな勾配である。秋なれば野草春なれば紅躑躅眼も綾に彩る。十町にして右手の絶壁に呼ばゝ答へる鸚鵡岩がある。澁峠は天牛に横はり白根山は隱れて未だ顯はれぬ溪谷迫るとこ

ろ蟻の戸渡りを過ぎつゝ綠樹の間に常布の瀧を見る。急坂を行けば溪流路を横ぎるに逢うが、毒水さて口に入るべからずさ言ひ傳へる。約十町にして櫻清水あり掬で含めば甘露の味がある。この邊り山樹悉く枯れて甚だ物凄い。登りつくして芳ケ平に出る。高原の風光は恰も庭園の如く小池各所に點在し、殊に小蓋の池の浮島は幽邃を極める。路を左に求めて進めば羊腸の小徑いよ〳〵險しく、燒石磊々として樹林皆な白骨さなり、處々の凹地に雪谷殘る。登り盡くした處は火口壁にして、水釜は物凄きまでに水青く、湯釜よりは湯氣濛々さ上り熱湯の波岸に寄せる。白根神社の奥の院はこの冷熱兩池の間にある。草津より頂上まで三里。叉弓池の畔を過ぎて万座溫泉に行くことが出來る。

三　高山植物

裾野に於て豐富なる各種の高山植物を採集することができる。以下はその主なるものである。

石松科　タウゲシバ△ヤチスギラン△ヒカゲノカヅラ△ミヤマヒカゲノカヅラ△タカネヒカゲノカヅラ△イハヒモ△アフヒカヅラ
松杉科　シラビソ
卷柏科　カタヒバ
樺木科　シラカバ
蓼　科　オンタデ
罌粟科　コマクサ
茅膏菜科　モウセンゴケ
景天科　マンネングサ
薔薇科　タカ子バラ
岩高蘭科　ガンカウラン

菫菜科　キバナノコマノツメ

繖形科　シラ子ニンジン

柳葉菜科　ヤナギラン

石南科　イハヒゲ△シラタマノキ△コメバツガザクラ△コケモモ△ザムカデ△クサレダマ

岩梅科　イハカヾミ

龍膽科　タウヤクリンダウ

第十七章　御荷鉾山

多野郡中央部に位する御荷鉾山（みかぼさん）は東西二峰に分れ、海拔東御荷鉾山は一千二百四十六米、西御荷鉾山は一千二百八十六米。西御荷鉾山は古の多胡の嶺（たこのね）であらうと云ふ、兩山共秩父古生層より成る。

東御荷鉾山へは神川村（藤岡町より八里）大字万場より一里十八町、日野村（同四里）大字日野より一里、三波川村（同五里）より二里、北甘樂郡青倉村（富岡町より四里）大字青倉より六里、西御荷鉾山へは日野村大字上日野より二里三十町にして頂上に達する。山上は樹木鬱々と茂つてゐる。

第七圖　利根川岩本簗

第三篇　溪流篇

第一章　利根川

一　總説

利根川は下流は漂渺大海に入り、中流は瀁々沃野をうるほし、その大に於て天下有數のものなるのみならず、水源は深奥幽玄かつて人跡の印するを許さず、今尚ほ神秘境として人爲外に超絶してゐるのは、彼をしてます／＼偉大ならしむるものである。實にもこの川の水源は自然の大なる秘密にして人力の克く探り得ざるもの、神聖にして近接すべからざる靈場である。大にして幽、幽にして聖なる利根川を有することは上毛の最大なる誇と云はねばならぬ。

利根郡水上村大字藤原村刀嶺嶽の溪に源を發すると云はれてゐる。南流して赤谷川薄根川片品川を入れ、山間を去つて吾妻川を合し、平野に下つて烏川の水を加へ國を兩斷して東南に轉じ、國境に出づるや直ちに渡良瀨川を合せる。國に在る流程は三十五里十八町と云ふ。

溪流の景象は探勝縱まである。即ち前橋市より利根發電株式會社の電車は川の東岸に沿ひ、高崎水力電氣株式會社の電車はその西岸を走る。而して澁川町よりは利根軌道株式會社の馬車ありて、溪谷を沼田町へ導くのである。國道は前橋より澁川沼田を經て清水越に通じ、西岸高崎電車の軌道を敷く所亦國道にして、澁川に於て前者と合する。

二　大河の趣

洋々として大河の趣を具ふるに至るのは烏川を合せ廣瀨川を入れてからのことで

ある。邑楽郡館林町を南へ距ること一里半、川俣の堤防がある。この邊り川幅甚だ廣く、漫々たる水は西岸を浸さんばかり、川を隔てゝ沃野は遠く涯しなく、眸を放てば秩父連山の彼方に富士の靈峰はその秀麗人をして拜跪せしめる。完全に白扇を倒しまに懸けたものと云ふを得ぬけれども、優にその三分の一を視界に入れ、足利熊谷に於てするよりも遠望はるかに勝るものがある。

上流に於て分流した廣瀨川は、新田郡世良田村大字米岡で再び利根川に入る。烏川は八町河岸に於て合し、兩合流点の間は茫漠たる中洲を形成し大小の島散在して村に島村と云ふのがあり、風景頗る奇である。

三　前橋附近

梅に香り櫻に裝ひ、三名山と利根川とを一眸の下に集めた前橋公園は[illegible]に於て大公園である。敷島河原の名も床しく青松白砂需も及ばず、奔流轄々、對岸榛名はその全影を展開して裾野遠く、左に淺間の圓錐形を挾むで、妙義の鋸齒秩父連峯の重壁を連れ、右に榛名と小野子子持との翠巒の間に吾妻越後の諸嶺起伏し、老松鬱たる上に赤城の雄峰を望み、朝は爽快夕は幽邃、詩趣頗る豐かである。市街より敷町岩神の飛石の奇あり、更に敷町松林の間潤水の中に、お艷が岩の巨巖がある。共に市人の好んで散策する所である、

此の地より電車に乘じて北に向ひ右に赤城左に榛名の次第に變化し行く山形を仰ぎ見るも面白く、山と川と全く接近した所に箱田村がある。赤城の脈を引く橘山の麓に一道危く通じ、仰ぐも俯すも斷崖幾十丈、心膽を寒からしむること一再に止まらぬ。

箱田村で一時電車を捨て、山徑東に上ること敷町にして木曾神社がある。巒峰四合する所老樹鬱茂して天を蔽ひ、祠堂甚だ古色を帶びる。樹陰に淙々の音をなすものは湧玉の泉とて宮内省御用鮎の生洲を設けてある。

四　澁川近傍

坂東の鐵橋を渡つて西岸に移る。橋梁の下水勢頗る急に、絶壁を洗ひ白砂を呑み平野に向つて奔馳する樣雄大無比である。

高崎電車を以てするなれば、榛名山の裾野を馳驅し、相馬山以下の高峰直ちに車窓に迫り、右顧すれば赤城山の裾野遠く緩く連り、翠微掬すべきものがある。

高崎電車は澁川を過ぎて榛名山伊香保溫泉に上り、前橋電車は町の中央にて之と連絡する。澁川は恰も極めて小なる京都の如き觀がある。東北西に山を繞らし、南方僅に平野に連り、利根川北より流れて之を貫く。公園に佇んで望めば、脚下に清流あり吾妻川來りて合し、轟々の響晝夜絶たず、遙か下流の方は煙霞模糊流の末を知らず、左右赤城は大に榛名は秀に、小野子子持を前衛として吾妻利根の連山翠綠滴つて溪谷に落ちんとする。

五　綾戸隧道

澁川で軌道馬車に乘替へ、走ること一里、鯉澤で吾妻川に架した吾妻橋を渡る。利根川岸に近づくを待つて諦視すれば、大河蜿蜒、急湍深淵迎接の遑もない。

進むに從つて赤城山と子持山との溪谷は愈〻狹く、山高くして遠望を遮ぎり、綾櫻隧道を過ぎると半里の間奇景連る。川を挾み岩壁峭つのみか巨岩山膚を突いて現れる。この邊り赤城の最高峰黑檜山は連嶺の上に突兀として九宵を摩してゐる谷は頗る深く西岸の高丘相携へて屢々道を斷たんとし、水は危岩怪石の根に白珠を躍らす。岩石を穿つた綾戸の隧道を過ぎ道は流に從つて彎曲し、山裾をめぐると川幅やゝ廣やかとなる。

岩本の簗を見て半里程にして戸鹿野村がある。瀨と云はず岸と云はず巨岩磊々、水流數十條に割かるゝかと疑はれ、夜泣石の怪さへありと聞いて、竦然として膚に

粟を生ずるやうな景である。橋の下流に於て片品川東より來つて合する。橋を渡つて急坂を上ればやがて沼田町に入る。

六　山中の大河

大利根は飽迄で大利根である。その溪流は决してせゝこましいものではない。如何にも河川の王者らしい威容と雅量とを具へてゐる。沼田町の西方を流るゝ時は岸壁高さも高く、水底の深さも深く、黝然と溪谷を陰らしむるばかりに碧く、泰山を憾がしむるばかりに瀨音轟き、幽寂の中にも厳として冒すべからざるものがある。

國道を踏んで更に北に向ふ。赤谷川の北西より來り合するまでは川幅甚だ廣く、中に數多の砂洲あつて碧と白と相襯し、若し西岸の山を見ぬならばこれが溪流かと疑念を生ずるも怪しく又滔々と奔馳する下流を望む時は、身の山中にあるを忘れ、恰も巨川大海に注ぐその河口かと首を傾かしむるも不思議である。即ち大利根の飽

第八圖　赤谷川黒岩

大利根たる所以である。

七　赤谷川

赤谷川は越後境なる仙ノ倉山に源を發し、稲包山より流るゝ西川、雨見山より發する須川を合せ東南に向つて流れ、月夜野町に至つて利根川に合する。合流點より數町にして縣道三國街道は國道と分れ、月夜野橋を渡り赤谷川に沿ふて上る。月夜野町を出で、新治村大字羽塲村に入れば黒岩の奇勝がある。兩岸絶壁をなし、川に臨んで純黒色の巨岩峭立し、岩上老松偃蹇し甚だ風趣がある。俯して臨めば奔流となり深潭と現する、扇岩龜岩鷄冠岩浮石等の奇岩散在し、眺望は小袖橋上最も勝れてゐる。

絶壁上の危道を登る事一里十町にてし湯宿溫泉に達する、本邦第二のラヂウム含有泉と稱せられ、溫度四十九度、附近に勝地少なからず、近年大にその名を謳はれ

來り浴する者次第に増加しつゝあり。四隣無比の靈泉である。沼田町より此の地まで馬車を通ずる。

更に險難の山徑三里にして三國峠に達する。山中に法師溫泉湧出し、泉質擴類泉にして溫度四十九度、胃病皮膚病子宮病に効ありと云ふ。千百三十米の高地に在つて溪山深邃暑熱を知らぬ幽境である。

八　別天地

月夜野橋より上流の利根川は流幅稍や狹小さなるが、水量は依然として多く、千代かけて悠々と流るゝ樣の尊とさよ。次第に水源近く村落稀となつて、漸く無人境に入るの寂寥に堪え難くなる。橋より三里小日向までは沼田より馬車が通ずる。小日向の對岸に湯原村あつて水上橋を架し、橋は水上三四十尺、岩石流水を乱刺する。兩岸益々迫り右ある峰巒は見上ぐる許りに嶮しく、左は國境の連山清水越も谷川

嶽もたゞ一色暗碧色に塗られ、幕を引いて二つの世界を隔つる如く、白雲密々中腹まで垂れて神座の靈光を包むが如く、所々に殘雪方形に眞白く、深綠の丘陵は金字塔形を現はして累々環列し恰も祭壇を設けたるが如く、是を逵つて彼を迎へその數五六十、日光燦然と輝けば碧は黑を加へ、深綠は黃を強くする。斯くの如き壯嚴神聖は大利根の上流ならでは見られぬものである。

道は屢々窮まらんとして通じ、鹿野澤村で士鹿橋を渡つて川の西岸に移る。橋は河中に島あつて一を渡り又一を渡る。兩岸は屹立何十丈の斷崖である。小日向より一里餘の急勾配も盡き、北より流下する湯檜曾川に沿ふて數町上れば湯檜曾に着する、此處に溫泉がある。以下上毛新聞主筆橋本不城氏の視察記「大利根に沿ふて」より數節を拔く。

九　藤原大森林

「其昔參勤交代の諸大名が往復した當時の湯檜曾の盛觀は想像も及ばぬ程で戸數百以上を有したが、信越線の開通と共に、スッカリ寂れ、溫泉のある事さへ忘れらるゝに至つた。四十一年木紙會社の興ると共に復活し、一時に戸數六十に上つた。けれどそれも僅かに一二年で、現在も二十五戸の總戸數といふ哀れな有樣である。

翌日も山には珍らしい好天氣、昨は登る一方でこそあつたれ、立派な國道は通じて居たが、之からは大利根の斷崖絕壁を辿るのである。否な匐ふて行くのだ。

湯檜曾川を前に上つた丈下つて大利根べりに出る。幸知小學校側から網子までは平地であるが、栗須を過ぐる頃より道漸く狹く仕つ切りなしの登となつた。對岸の迦葉山の裏山續きの尾花山。之を見送ると武尊山に連る鹿俣苇掛賓薹樹の諸山がつぎ〳〵に目の前へ迫つて來る。是等は所謂藤原の大森林で、針葉樹では落葉松白檜黒檜樅、濶葉樹では欅檜橅などが隙間もなく生ひ茂り原始的鬱林を成して居る。川幅漸く狹く斷崖愈々高く加ふるに兩岸から突き出た巨幹大木川面を覆ひ水の激

する音で脚下に大利根のあるのが解る程である。行くこと里餘、眼に入る物は綠の色許り、山迫つて遠望は利かずその單調に倦き〳〵する時突として對岸に屹立する數百丈の直立巖を見る之を立岩と云ふ。柿平と云ふ小字を過ぐ。一村三戸、什長伍長衛生組長の公職を各戸に分擔すと、此先には一村二戸の夜後といふさへ在る」

一〇　須田貝

「藤原橋を渡つて愈々別天地藤原村に入る。橋上より下流を望むと巨巖迫りて水の通ずる所が三四尺にも見え、逍がの大利根も鬱屈さうに流れて行く、此處は橋詰といひ昔の關所の跡だといふ。程なく柳淀に着し林忠七方に辿り付いた。……

武尊川の合する横山久保邊りは比較的平地廣く、田畑また開け人家も大分あるが一畝田からは一段急勾配になつて來る。大利根に沿ひながら瀬音さへ聽く事のならぬ程高所を行くのだ、湯檜曾から四里餘り須田貝の中島新右衛門氏方に漸く匐ひ付

いた。……

須田貝を出てから暫くは胸突く許りの急坂である。右に左に曲折して電形の道を喘ぎ〳〵登る、汗みどろになつて辛而神社側の高所に出た。

此處は藤原村第一の高所で海拔二千七百尺、利根第一の高山武尊山も別段高くも見えぬ。須田貝から小一里行くと、大芦村から芦澤に通ずる大利根最終の架橋がある。兩岸から突出した支柱の上に二本丸太を懸渡し細枝を横に繩からげにした危險千萬のもの、一歩を過まれば橋下千仭の溪澁も此世のものならず、橋名を矢倉橋と云ふ。……

矢倉橋を渡て道なき懸崖を流れに沿ふと行くと、字芦澤地内の俗稱盜人澤といふ所に出る。赤色又は青色を帶びた石が澤にその一端を露出し川床にまで及び、流れも爲に色を變へて見える。專門家の鑑定によると全山此種の岩盤であるといふ……

赤石の質は蠟石であるが極めて硬質である。色は純然たる赤色と青色の兩種ある中にも青色の地に赤い模様を現はした物、白青赤の三色を劃然と區別して取合せた物などは最も珍とすべきである。……

二　水源

芦澤から先は人家皆無で、五里許り上流の湯の湧く所に湯の花の名を存する丈で更に二里上り熊を獵る獵小屋に達し、尙ほ二三里で水長澤といふに出る。此澤に三蔓ある岩の眞中を文珠岩といひ文珠菩薩の本體となす、其乳と思はる邊りから水を吐き出しその下が瀧となつて居る、旅人は之が水源であると信じて居る。

或年の事村人が水源に遡り水を吐き出して居る文珠岩の苔をむしつた事があつた不思議や其年藤原全村は凶作であつた、爾來農肝の時には水源へ上らぬ掟である。尤とも舊七月の渇水後でなければ大利根に合する奈良澤川を徒歩で渡る事が出來ぬ又實際の水源は文珠岩よりグツと上流にあるのだ。

水長澤から半里程西方の崖から岩が食ひ合さる、其下を水が流れて居る。之を覆喰岩と云つて實際の水源であるので、覆喰岩の盡くる處は一体の平原で、腰にも屆かぬ松が生えて居る、何分一年中雪の消ゆる間が三十日か四十日足らずであるから伸る間とてもないのである」。

第二章　利根川水源

一　傳說

利根川の水源は未だ疑問の裡に埋もれ是は上毛に於ける大なる謎の一である。彼が前には萬能慧智の現代人も太古蒙昧の民と何等異る所はない。絶大なる科學の光も尚ほかの闇黑を驅逐することが出來ぬ。人間百千の努力もこの大自然を征服するには餘りに微弱である。この前人未發の靈域はたゞ一の口碑によつておぼろに想像することを許されるのみで、賢者も愚者も大人も小兒もその口碑が水源に關する唯一の智識である。

その口碑と云ふのは甚だ神祕的で如何にも傳說らしく、ます／＼利根川を大ならしむるものとして面白い。永久に開かれぬ扉の如く峻嶺は川の上流を護つてゐる。

その扉を開いて山奥に踏入つたものは再び里に歸ることが出來ない。山中には恐ろしい鬼女が棲んでゐて、人を見れば殺して食ふのである。强情我慢なあの男もこの男も鬼女に食れて歸つて來ない。藤原村でも既に十幾人と云ふ數になつた。そうでなくとも其處は尊い所であるから、汚れた人間が迷ひ込むならば、山靈の激怒に觸れて忽ち暴風雨起り、谷に落ちて死んでしまうのである。しかしたつた一度、下界の人間にその實体を示したことがある。百數十年前のことである。一人の男が山中深く分け入つた、所が不圖流上に文殊菩薩の巨像跪座するを見た。その乳頭と思はるゝ所から滾々と水が涌いて流れる。またその傍に燦爛と輝く物体を認めたと云ふ里人相傳へてこれを水源となした。

二　最初の探險

然し早晩水源の探險が企てられずには已まなかつた。遂にその實現さるゝ時が來たのである。それは此の冒險の最初のものであつた。第二の計畫は今日に至るも未だ行はれずにゐる、稍や仰山のものであつたが、その結果はあまり成功であつたと云ふことできない。水源の疑問は依然疑問、謎は依然謎として殘されてゐる。

時は明治二十七年九月、探險隊は左の十七名を以て組織された。

技師小西文之進、縣第二課地理掛森下鑛吉、同深井仙八、利根郡長櫻井小太郎、同郡書記遠藤正太郎、沼田小學校長石田勝太郎、沼田警察署長吉田忠棟、同署巡査部長坂本武雄、同巡査鹽原甚藏、沼田收税署長榎本嘉助、沼田小林區署長大屋榮太郎、同森林監守長松榮之進、同高野峯之進、水上村長木村政治郎、同前村長大塚直吉、大字藤原村區長中島甚五左衛門、尋常師範學校敎諭渡邊千治郎

一行の目的としては水源を確めて越後岩代上野の國境を定むるを主とし、地質を調査して將來開拓するに足る原野ありや良山林ありやを探り、從來藤原村百三十六萬町歩(十三里四方)と稱するも果して事實なるや否やを明にし、併せて新奇なる動

植物及鑛物を發見せんとするにあつた。

而してその探險記は渡邊敦論の筆に成り、同年十月發行の「上野敎育會雜誌」に揭げられ十二月號まで連載された。又「太陽」第一卷第一號にも揭載された。これよりその梗槪を記さう。

三　湯の小屋溫泉

一行は導者三名人夫十九名を雇ひ、合計三十九名の大勢を以て九月十九日沼田町を出發し湯檜曾溫泉に至つた。用意する所のもの、十日間の食糧として米一石餠三斗鰹節數十本味噌醬油食鹽釜鍋等、草鞋二百足桐油三枚護身用として拳銃を携ふるもの四人刀を帶ぶる者一人獵銃を携へた人夫二人。

湯檜曾に行くまでは確たる方針が定まつてゐなかつた。茲に於て會議を開いたが水源を採り越後國境の連山を踏破して歸らうと云ふ說と、清水越より山脈を傳つて

源を求めやうとする說と二派に分れ、甲論乙駁長時間に亘つて論議した結果、遂に水源說が勝利を得た。

その夜降雨あり、廿日は雨を冒して進發し藤原村に至つて雨歇み空霽れた。川岸を離れ須原峠を越へ、湯の小屋に行くと溫泉宿が一軒あつた。浴客數人あり、主人夫婦は不在であつたが、同夜は其處に泊つた。浴客一人が云ふには、この奥には一樹もないと。宿は利根支流湯の小屋川に臨み、二町程下ると湯元瀧大瀧小瀧の大瀑布あり、實に壯觀を極めてゐる。夜、主人が歸宅したので同行を勸めると、水源を行き利根岳に登り國境を通過して清水越に出て歸るにも、又利根岳より尾瀨沼に出て歸るにも、少くとも十數日を要する。その不足分の食糧を脊負つて行くのは眞平だ藤原村ではかゝる深山に立入るを禁じてゐると固く拒んだ。

廿一日に再び須原峠を登り、三人の行者に逢ふた。文殊菩薩を拜しに行かうと云ふ殊勝の者である。これに同行を許して峠を越え、字上ノ原の大平野に出た。廣袤

一萬町歩、水あり萓草がある。大芦村に辿り着いた時に櫻井郡長は引返すことになつた。

四 俄作りの温泉槽

村を過ぐれば愈々無人の境である。河岸の絶壁を傳ふ細徑を進むこと二里にして道全く盡きた。獵夫の道さへ見當らぬ。

道が無いので水流に沿ふて溯つた。兩岸は險崖絶壁にして樹木鬱蒼たるものである。こんなことでは假令道路を開き得るも水源まで幾日を要するか判からない。そこで寒冽を堪えて水流を渉ることゝなつた。水中石礫累々、踏めばツルリと足が辷る。石間に足を突込み辷らぬ用心して進んだ。足が凍る程に冷めたい。川は山角に沿ふて甚だ屈曲し、所々に小許の磧のあるを幸ひ、なるべく磧上を進むやうにしたが忽ちにして水中忽ちにして磧上、水に足を入れゝば全身ブルブルと戰慄を止め得

ない。一里半にして急に暖氣を感じたので、よく注意して見ると數ヶ所磧礫の間から温泉が湧いてゐる。湯の花或は清水澤と云ふのは此處である。この邊り川幅廣く水量は甚だ多い。

衆議此處に露營するに決し川に近く平坦の地を選んだ。人夫十數人は大石を除き砂を堀つて水を湛え、俄作りの温泉槽が二所出來上つた。少々熱いので川の水を汲込んで加減したが、水を汲む桶がないから笠を用ひる始末、然し爽快云ふばかりなく終夜湯に浸つて眠つたものさへある。夜半遠く近くに猿が啼く。

五 天井の大蛇

廿二日は又も水中を溯つた。一里餘進むと荊棘中に一個の板小屋を發見した。藍で扉を作り小屋は既に倒壞せんとしてゐる。獵師小屋であつたが人氣はなく、古箱數十散乱し開けて見れば中は空虚であつた。何氣なしに天井を仰ぐと梁に數尺の大

蛇横はり、小蚯を一匹脊に負ふて下を睨んでゐる。驚いて杖で叩き落し脳を砕いて殺した。蛇は山かゞしであつた。

また一里を進むと水長澤と利根本流との落合に出た。餅を炙つて食ひながら又しても議論が始まつた。甲は依然として水中を溯るべしと主張する。乙は山に登り山脈を通過して水源の上に出づべしと論ずる。人夫は人夫で前進甚だ危險であるから今夜は此處に露營して三日間の食糧を携へ、水源を探究した上引返さうと弱音を吐く。議論家揃ひだから容易に決しない。吉田警察署長は憤然乃公獨りでも行つて見せると力んで水中を歩き始めたので、衆は澁々腰を上げてつゞいた。

水勢益々急となり兩岸の岩壁愈々嶮となる。河幅も頗る縮少して前進の困難名狀すべかざるものがある。一里にして岸壁恰も屛風の如く流上には大瀑布がかゝりて瀧壺深淵をなしてゐる。進退谷まつてしまつた。

遣うなると又議論である。往路を繰返して水長澤に戻り、一晩泊つてとつくり考へやうではないかと云ふのが軟派。嶮崖を攀ぢて山に登り、山脈傳ひに水源を探らうと云ふのが硬派、兩者口角泡を飛ばして論じたが遂に硬派の主張通つて嶮崖を攀づることゝなつた。

列を正して千仞の崖を匐ひ登るのであるが、殆ど直立して時に突兀たる危岩前に横はり、時に佶倔たる石南樹体を遮ぎる。折も折とて先頭が荊棘中の黄蜂の巣を突いたものだから、後に續く一行悉く蜂劍に襲はるゝの難にあつたが、片手岩角から離せば忽ち斷崖を落下せねばならぬので、顔と云はず手と云はず頸首と云はず亂刺するに任せて、顔面ために脹れ上り、字義通りに泣面に蜂であつた。

六　水源なるぞ

午後五時頃井戸澤山脈の一峯に上つて露宿することゝなつた。高さ四千五百尺、顧みれば前方の山腹に白雪堆きを見る。その夜の寒氣甚だしく、平地がないから長

さ丈餘の熊笹を押倒し、その上に木葉や蓆を敷いて臥したが笹虱に食はれて安眠出來ない。枯木がないので立木を伐つて火を付ける。前日來の難苦に遉が剛氣の吉田署長も遂に急病を起し、脉搏甚だ迅く熱も頗る高い。頭を冷やしてやらうと思ふても附近に一滴の水を得ることも出來ず、鹽原巡査は劍を拔き顔に當てゝ漸く冷やした、涙の出るやうな話である。幸に翌朝は稍や快方に向つた。

翌日も荊棘を開いて山背を登つた。前日來口に一滴の水も入れぬので渇を覺えること甚しく、梅干を含んでも唾液が出て來ぬ。笹の葉の上に点々たる露を嘗めて苦痛を忍んでゐたが、日の高くなるに從つてその露も悉く消えてしまつた。而も渇はます〳〵甚しい。

吉田署長は病再發して歩けなくなつたので、三名を看護に付けて歸ることゝなつた。三人の行者も怖氣付いたか、食糧不足を口實に同じく歸つてしまつた。道に石南樹蟠屈し黄楊繁茂して愈々難險、俯視して水を求めんとすれば斷崖絶壁數百尺の

下に流れてゐる。山頂に至れば危岩突兀頭上に落ちんとして、又しても進退谷まつてしまつた。綱を力に岩角を攀ぢ、千辛萬苦して井戸澤山脈上に至れば、一小窪あり、涓滴の水集まつて流となつてゐる。一同蘇生の思ひをなして飯を焚いた。今までは水がないから飯が焚けず餅ばかり嚙んでゐたのである。

雲霧漸次霽れて四面の峻岳頭を現はし、昨來漲つて利根の水は蜿蜒幽谷の間に白練を布き、その盡くる所は大利根岳となる。屹立天に朝して壯絶言語に絶してゐる彼處こそ水源なるぞ！　衆は一齊に萬歳を絶叫したのである。

七　文珠菩薩

既に水源を突止めた上からは、上越國境の山脈を通過して尾瀬沼に出で戸倉村を經て歸ることに異議なく決した。熊笹の中に身を沒し、或は險崖を辷り降り溪流を求めて露宿しやうとしたが、日は暮れて溪流を見出すことが出來ない。水聲近く足

下に響いても嶮崖一歩だに進まれぬ。餅を食ふて思案するとしたが、その餅も盡きて僅に二小片を餘すのみとなつた。

山の斜面に一夜を明かすことゝなつたが、横になればごろ〱と落ちる。うづくまるは下、樹に凭れるは中、樹株に足を支へたのは上、一歩誤れば谷底の鬼と變る鬼にあらずに廿四日の朝を迎へた。人夫は夜の明くるを待つて鍋と米とを携へ、溪流に下つて飯を焚いて來た。飯に有りついた元氣で山を降り、水長澤支流を溯つたこの支流は利根本流と長さを等しくし、同じ大利根岳より流れ來る。數間毎に必ず瀑布があつて、西岸は一面屏風の如き岩壁であるから、如何に危險な瀑布たりとも之を過ぐるより外に道はない。瀑布を上つて俯視すれば毛髪辣々脚膝戰くばかり、しかし山水の絶佳なる或は耶馬溪にも勝り、妙義山も三舍を避くべきものである。かくして途にかの口碑に傳はる文殊菩薩を發見するに至つた。これは原文を揭ぐるに若かず。

「愈々溯れば愈々奇にして、岩皆な凡ならず、右側の奇峯を越えて俯視すれば豈圖らんや淺間の一丘上文殊菩薩の跪座せるあり、百二十年以前に見たる所の人ありと傳ふる所の文殊岩は即ち之れなり、衆皆拍手喝采して探險者一行の大發見を喜ぶ直ちに丘下に到り、仰ぎ見れば丘の高さ百尺餘天然の奇岩兀として其頂上に立ち一見人工を加へたる文殊菩薩に髣髴せり、傍に一大古松あり欝さして此文殊岩を被へり。丘を攀登して岩下に近づかんとするも嶮崖頗る甚しく、小西君及び余の二人奮發一番、衆に先つて上る、他の者次で到る。岩上に近づけば菩薩の乳頭と覺しき處に一穴あり、頭上にも亦穴を開けり、古人の所謂利根水源は文珠菩薩の乳より出づとは即ち積雪上を踏み來りし際、雪融けて水となり此乳頭より滴下せるを見たるを云ふなるべし、されども水源を以て此處に在りとなすは非なり………且つ傍に直下數丈の瀑布ありて、幅も頗る廣し、其地の幽にして其景の奇なる眞に好仙境と謂つべし、因に云ふ此文珠岩は皆花崗石より成りて雨水の爲め斯くは水蝕したるなり」

喜作と云ふ人夫、兩三日前より病に冒されてゐたが、文珠菩薩を發見するや、頓首再拜して飯一椀鰹節一本を捧げ、暫く默禱の後恭しく飯を食ふたら、病は漸次に癒えたそうな。一行は川を上り日暮れ對岸に露宿した。白樺の樹皮が圓座の眞中に心地よく燃え立つた。

七　尾瀬沼

廿九日は又も溪流を溯り無數の瀑布に出逢つた。五千五百呎の高所に至れば、溪流全く盡きて岩罅から滾々と湧き出てゐる。山を上る數十間にして又小流あり、岩穴に入りて行衞も知らぬ。尾瀬ヶ原に至る途中に凡そ一里の伏流を發見した。嶮峻殆どその極度に達して、一行概れ岩角で負傷した。水源盡きて進行漸く容易となり六千四百尺の高度の峰に達すれば前日來經過した所も歷々眼眸に入り、藤原村の深山幽谷の廣袤、溪流の長程初めて瞭乎となつた。北方に眼を轉ずれば越後の大部岩

代の一部脚下に集り、陸地の盡くる所青煙一抹遠く日本海を眺めて雲煙を拂へば佐渡ヶ島も見えるであらう。越後の駒ヶ岳八海山岩代の燧ヶ嶽我が大利根岳は天を支へる足の如くに巍然たり。越後岩代には決して雪を見ず、利根源泉の上部に至つて皚々たるものがある。

上越の國界たる山脈盡きて大平原あり、平原盡きて一山脈あり、之れを過ぐれば尾瀬ヶ原に出る。これを渡つて側の森林で露泊し、その夜大雨暴風にあつたが暫くにして霽れた。高山と云ふ高山に登つたが尾瀬沼が見えない。高い山で人夫善作が高樹に攀じて望めば眼下に茫々たる大湖があつた。尙ほ幾個かの山を越えて沼岸に出で、双眼鏡を眼に當てると遠く對岸に板小屋が見える。

小屋を望んで沼岸を渡ると泥深く腿を沒した。その日は沼岸に宿つたが身体も夢も雨にびしよ濡れとなつた。翌日はじめて淺洲のある所に出で、砂上人馬の跡を發見し破鞋と馬糞と所々に散つてゐた。即ち會津街道である。尾瀬峠を越えて戸倉村

に泊し、廿八日花咲峠を過ぎて川場温泉に至り、此處で數日間生死を共にした人夫十五名と別れた。而して廿九日沼田に歸着した。探險に要した日數十一日。一行の艱難辛苦もさることながら眞實の水源には未だ人跡を印してはゐない。

第三章　吾妻川

一　總説

國の西北部を領して、全土高山峻岳の起伏するに任せた吾妻郡を、南北に割りて東流するものは吾妻川である。郡の西端上信の界に位する鳥居峠の附近に源を發し淺間山四阿山草津白根の大高原を貫いて東に向ひ、南流する万座川、須川、山田川(四萬川)、名久田川、北流する熊川、溫川、沼尾川等の支流を合せて、榛名山の北麓を廻つて群馬郡に入り、長尾村大字白井村で利根川に合する。流程廿一里一町實に利根川支流中最大のものである。

全流溪澗を縫ひ、急湍さふり深淵と變じ、絕壁削るが如く、加ふるに岩石の怪峯巒の奇觀所に在つて、溪流の美の諸要素を具へる。山中に靈泉の湧出する五指を屈

するも足らず、幽寂深邃の仙境枚擧に遑なく、全郡を擧げて好箇の遊覽地となつてゐる。郡民が小瑞西と誇稱するも强ち自畫自贊ではない。

縣道は澁川より來り、中之條原町長野原を過ぎ、鳥居峠を經て信濃に入るまで、全路この川の峽谷に通ずるので、行く行く淸瀨碧潭の幽趣を味ふことができる。吾妻軌道會社は澁川より中之條まで通じ、更に中之條より四萬川原湯草津等の溫泉へは馬車の便がある。

二　岩井洞

澁川より軌道馬車に乘じ、吾妻川に架した吾妻橋を渡つてからは、溪谷を左に小野子山を右に、轣轆の響は直ちに山中に誘ふのである。深淵を迎へ翠巒を送つて村上村に入ると、川に莅んで岩井洞の奇がある。千態萬狀の巖石を以て山となし、老樹參差、巖腹には觀音堂を安じ、巖下に碧流白砂に灑いで淸く、最致甚だ佳なるものがある。

馬車に搖らるゝこと五里餘にして中之條町に達する、四萬澤渡の溫泉に至るには草津街道と分れて北に向はねばならぬ。

三　四萬川

山田川を下瞰しつゝ凹凸隘路を二里半にして川を渡り、上澤渡川上流に溯れば澤渡溫泉がある。海拔五百米、三方に巒峯重圍し、東南方僅に稍や開けてゐる。嵐氣常に搖曳して一の幽境を作り、泉質鹽類泉にして、胃病腺病皮膚病等に特効ありと云ふ。此の地より西方へ二里暮坂峠がある。途中有笠山と呼ぶ巖山を右に見る。高さ百六十尺の大岩の瀧巖脊に懸り、巖腹に不動祠がある。峠は甚だ大にして路頗る險、然し頂上の眺望は絶佳である。又二里にして小雨村に至る、小雨川の溪流にも奇勝少くない、更に一里にして草津溫泉に達する。

また四万川の上流二里にして四万温泉に達する、新湯川の來り會する三叉形地に在つて、海拔七百米、山口、新湯、日向見の三ヶ所より成る。泉質鹽類泉にして胃病僂麻質斯皮膚病貧血症に最も好しと云ふ。四繞の山峰翠黴にして潺聲濺々河鹿の聲殊に愛らしく、深山の閑寂身に泌みわたる。山口温泉の手前七町の處、嘉満淵は双壁流域を狭めて奇巖起ち或は臥し、奔湍之に激して鏗々の響満崖を震はし、飛沫四散、白色の巨巖の間に、紺青にして淸冽水晶の如き水沸々として沸く。新湯より數町溪を左に登れば日向見湯である。四山の峡中七泉の瀧、小泉の瀧、玉簾の瀧、麻耶の瀧等万斛の珠玉を轉じ、水色樹影皆な仙寰のものである。北方十町にして山頭蠟石よりなる蠟石山あり、新湯を距る八町東南に連るものに、全山水晶帶を以て成る水晶山がある。

七　岩櫃山

中之條より馬車を驅り山田川橋を渡りて西に向ふ。山田川の吾妻本流に會する所山田川の水は蒼く、吾妻川の水は稍や濁り河原は皆赭石である。濁るのは上流に於て草津硫酸泉の末流を注ぎこむからだ。

忽ちにして原町に入る。町の西に巖嶂突兀たるものは豪族吾妻太郎の古城趾岩櫃山(八百二米)である。馬車を捨てゝ右の小徑に入り、六七町行けば不動堂あり、觀音山と云ふ巖石の山聳え、又の名を瀧峨山(瀧臥山)と云ふ。山腹なる二個の洞窟、象の鼻とは奇石の徑を蔽ふもの、賽の河原とは岩窟に石佛を並べた所である。不動堂の左に飛龍の瀧(三重の瀧)懸り、高さ十二丈二段に分れて落下する。

山の後に聳えるもの即ち岩櫃山にして、是に登るには飛龍の瀧の畔りなる岩窟を潜り抜け、數町にして平澤村に出で、溪流の右岸に上れば眞田の一本槍の巨巖の下に穴あり、これぞ岩櫃である。峰上に立てば赤城榛名妙義の三山鼎立するを望見する。高峰をめぐつて絶壁を下り、山窟を過ぎ再び斷崖を下りて少し行けば千疊敷の

洞窟がある。

五　關東の耶馬溪

馬車麻畑の間を行き盡せば、山容水態全く一變して、玆に所謂關東の耶馬溪を現出するのである。

川中温泉に行くには岩島村の中程にて右に折れ、溪流と共に上ること十町、泉質無色透明にして稍や苦鹹味を帶び硫化水素臭を有する。

尙ほも草津街道を行く。左右の峰は急に迫り來て、道は愈々細く益々險しく十數仭の蜒下には一道の溪流岩を呑み岸を噛んで、或は激し或は湛え、狂亂の限りを盡してゐる。水は飽迄まで蒼く、この物凄きばかりの蒼色は他の何れの溪流に於ても求めることが出來ぬ。即ち草津溫泉の爲した業だと云ふ。碧潭となつては龍も棲むかと疑はれ、岩を抱いては巨蛇怒るかと思はれる。

頭上見上ぐるばかりの山上には奇岩舞ふが如く、「八町くらがり」と云ふ所、怪石水を遮り懸崖谿を扼して天日を仰がず、「馬ころがし」と云ふ所、溪は愈々逼り杖を差出せば彼岸を衝くか、猿は常に跳んで往來すると云ふ。直下數十丈、奔湍轟々地軸を震はす。

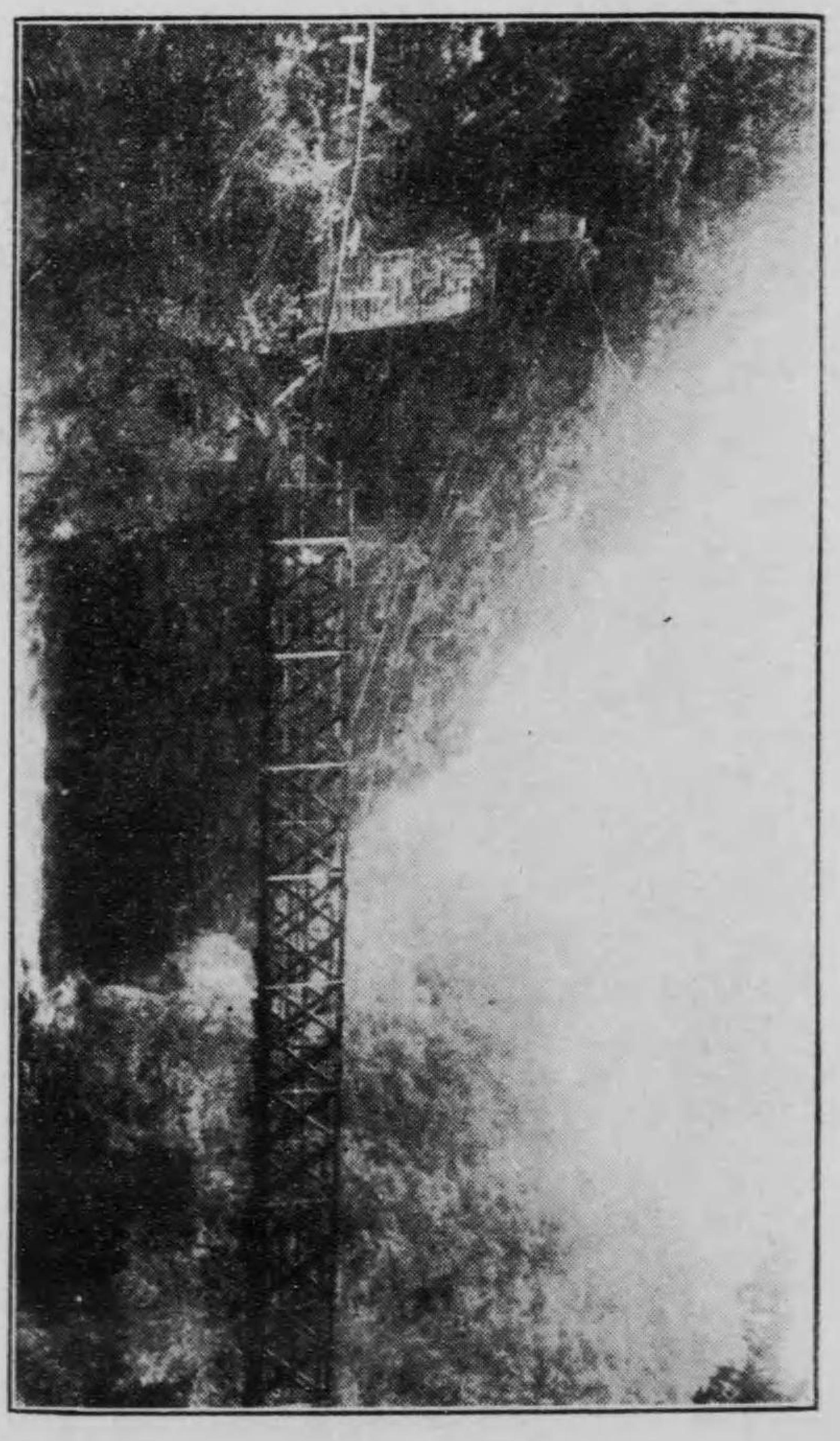
兩岸の斷崖には栗楓躑躅樅等鬱茂し、夏は濃綠溪を暗くし、秋は紅葉流を染める此邊り紅葉の美は溪流の奇をなして光彩あらしめ、初夏長藤岩躑躅紅紫を競ふも妖艶限りないことである。

峽中一里、左に折れて川を渡れば川原湯溫泉がある。吾妻の溪谷を抱き前に嚴絲たる天狗峰を仰ぎ、雲表に聳える峻峯を望み、眺望廣やかな所にして、地の幽邃なる郡中無比と稱せられる。泉質無色透明の硫黃泉にして胃病皮膚病腫物に特効ありと云ふ。

草津本道に戻り、再び峻路を攀る。丸岩橫壁の諸山の危巖頭上に落ちんとし、溪

流は奇態を盡くしてゐる。

長野原町に入り三路に岐れる。本道は更に西に延び、右は草津道左は淺間山麓を過ぎて輕井澤に通ずるものである。



第九圖　片品川赤城根橋

第四章　片品川

一　總説

利根川の上流に於ける支流中、最も大にして且つ最も特色ある片品川は、源を利根郡片品村大字戸倉村中俣山に發し、小川追貝川根利川等を合せ赤城山の北麓を西流して、同郡利南村大字戸鹿野新町に至つて利根川に注ぐ。此の流程十四里。

日本脊梁山脈の餘波連亘する北上州に於て、利根川の兩翼となつて奔流するものは吾妻川と片品川とである。此の兩川を比較する時甚だ興味を感ずる。兩者共その水源地域に火山を持つてをる。然れども吾妻川は淺間活火山草津白根の休火山、片品川は日光白根の休火山燧嶽の死火山なることの相違は、やがて彼をして活動的ならしめ之をして靜默的ならしめ、又彼をして奇骨あらしめ、是をして溫和ならしめ

てゐる。淺間の噴煙は吾妻川上流の山光水色に復雜なる變化を與へ、菅沼尾瀬沼は片品川の上流の山容水態に永久の靜止を命じてゐる。吾妻の峰は岩脈を露はし奇形百出してゐるに、片品の夫れは悉く老樹鬱茂して山形概れ平凡である。溪流は數十仞の斷崖相逼り、上流大高原を有するは吾妻、岸壁比較的低く、上流に於て大森林溪谷を埋むるものは片品である。是の赤城根橋附近追貝の奇勝を以て彼の耶馬溪に比するとも、尙ほ且つ甚だ優美なるを免れぬ。即ち吾妻川は飽迄で男性的にして片品川は到底女性的である。沿岸に溫泉の湧出多く、その南岸に彼は榛名是は赤城の名山を控ふるも、奇異なる對照と云はればならぬ。

沼田町より福島縣に至る縣道、所謂會津街道は常に川に接近してはゐない、道路と河流と交錯する附近に薗原の溪谷あり、追貝の奇景がある。馬車は沼田より高平迄で通じ、人力車は追貝迄で赴く。

二　薗原の溪谷

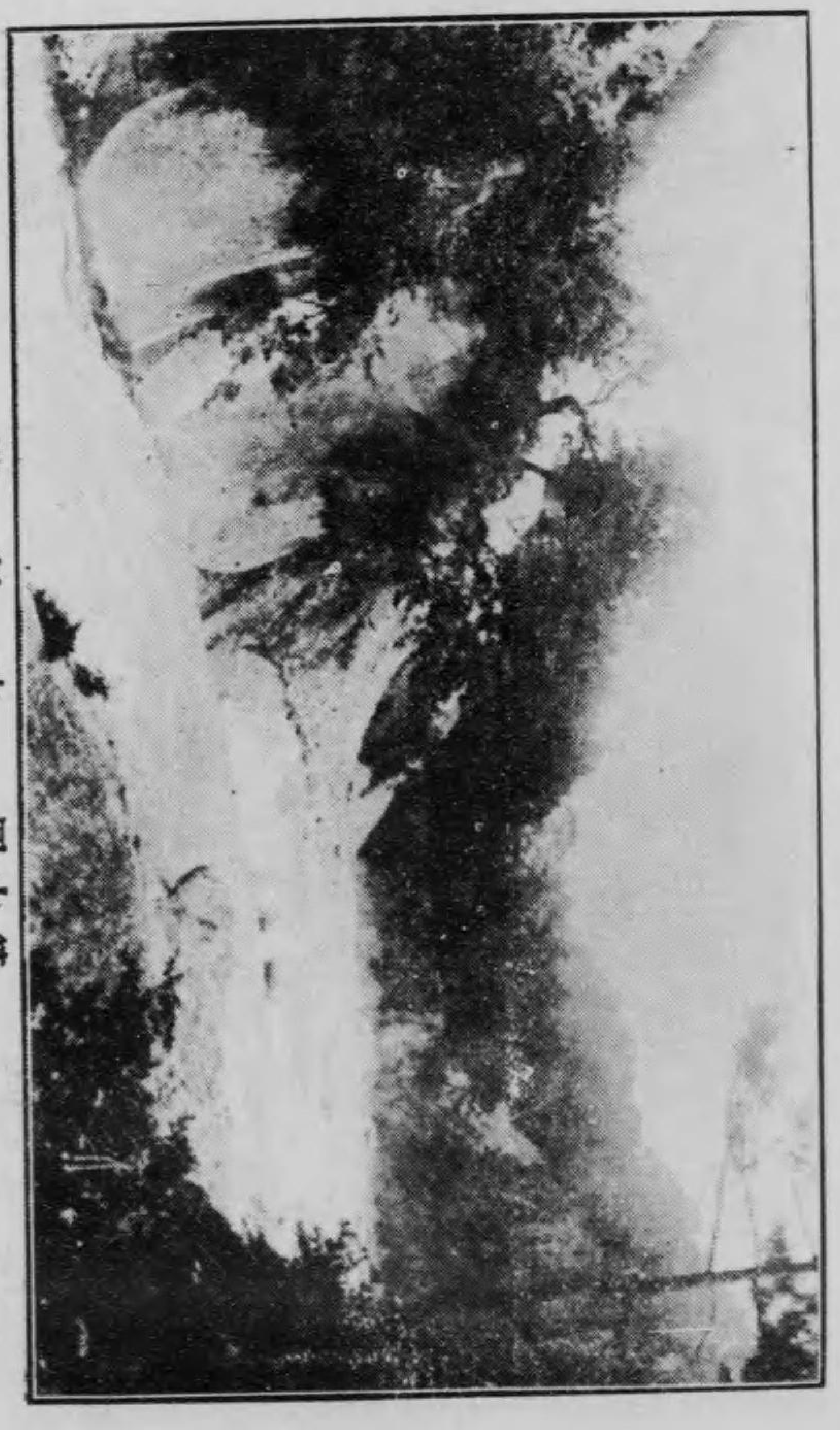
沼田町より馬車に乘じて東に走らす。沿道右に赤城山左に武尊迦葉三峰の連山を仰ぎ、桑園麥隴遠く續いて、稍や狹小なれど高原の趣は充分である。一里餘にして路傍に休み茶屋あり茶屋の裏は片品の谷にして、兩岸は緩き傾斜を成し、谷の底には白堊茅屋点在し對岸の赤城山の裾野頗る廣大である、斯かる壯大なる景貌の溪流は他の河川に於て全く見られぬ。

更に一里餘を車上に搖られ少しく急坂を下ると高平村に至る、此處で馬車を降り東に進むと二路に岐れる。左は直ちに栗生峠にして九十九折の山徑は頗る急峻、登つて絶頂(九百七十六米)に達すれば、東に大原新町の盆地を俯瞰するのみで、眼界甚だ狹小であるが、連峰を挺でゝ始めて日光白根の双峰を指し得る。下りは容易にして忽ち大原新町に入る。

前記右なる道も同じく大原新町に通ずるのであるが、峠道よりも二十餘町の長距離である。然し片品川に沿ひ比較的坦々として居る。行くこと半里にして川に臨んで利根發電株式會社の岩室發電所建てられ此の邊りは怪石流を挾んで、碧潭を作り急瀨を現はす。岩上小亭あり、風雅山中のものと思はれぬ。

溪流の凄さ秋季紅葉の美は此の附近を以て關門とする。行くこと半里にして赤城根の危橋がある。吊橋十數仭の谷に架し、此處より十數町の上流薗原の吊橋までの間は、水態の奇趣言語に絕し、紅葉黃葉滿峰に燃ゆるの美觀、碓氷峠に優るとも劣らぬと思はれる。

幽谷に吊橋を架した趣は譬へやうもない。隘路は東岸絕壁の中腹を這ひ、對岸は見上ぐる許かりある高巒、谷は眼舞ひするほど深く、水は藍を湛え靑を融かし紫を含み、加ふるに河底の岩石は怪と奇との諸々相を現はし或は怒り或は眠り、鴨の夢磬形等の優雅なる名稱は、是等奇岩の生んだ深淵の形色に冠らせたものである。此



第十圖　吹割瀧

の雅に清く豔に澄みたる溪流を挾む巒峰が、秋の霜至らば翠緑忽ち紅潮し或は黃金色に榮え、水面に映じて華麗を極め、野州鹽原に髣髴たるものがある。

薗原橋を渡り栗生峠を左に見て進めば軈て大原新町に入り峠道と合する。この町の入口なる小徑を右に曲れば十數町にして老神溫泉に達する。溫泉は片品川原の砂中に湧き、砂を掘って湛ゐたもの、梅毒に神効ありとて名高い。谷迫つて兩崖高く岸に岩石磊々、景象凡ならぬものがある。

三　吹割の瀧

大原新町道の外老神溫泉からも直ちに追貝に行くことができ、千歲橋の邊りで兩道合する。橋は片品川に架したもの、崕は甚だ狹く且つ高く、流水を堰かんとする危岩と岩根を割かんとする奔流とは、不斷に鬪ふて轄々轟々、絕壁の下水は彼方に伸び此方に卷き、その變化の妙は眼醒る許りである。

橋を渡れば追貝村に入る。吹割の瀧は千歳橋の上流數町の處にあり、實に天然の奇を極めその巧緻驚嘆に價するが、この瀧の存在は大町桂月氏の「關東の山水」中の名文に依つて、始めて天下に知られたもの、されば茲にこれを借りてわが叙景に代ゆるも決して失當ではあるまい。

「……さらば今日は、裏の瀧でも見て置かんとて、小童に伴はれて行きしが、たいしたことも無かるべしと思ひの外、未だ天下に名こそ無けれ、實にこれ關東無双の奇瀑也。

千歳橋の上流數町に當りて、片品川の全石を底になして、その幅一町以上にも及び、水はその上をうすく蓋ひて流る。その底の全石右岸より懸崖となりて裂け來り左岸に達せんとして達せず、左岸よりまた懸崖となり、右岸よりの懸崖とわづか五六尺を隔て、延びゆき、右岸に達せんとして達せず、圓味を帶びて左岸へひきかへす。その大磐石の裂けて一落せる樣、恰も平假名の「て」の字の如く。高さは十數尺

なるが右岸より裂けたる懸崖は長さ八十間、右岸よりのは百二十間、合せて二百間隙間もなく水流れ落ちて瀧となる。中央數十間の處は川を横斷し、向ひあつて深淵に落ち込む「嘗て試みに三十尋の縄に石をつけてさげて見しに底までは達せざりき」といふ。一種の水晶簾が二重になりて、川にかゝれりとでも形容すべし。「この瀑は名を何といふぞ」と問へば童答へて曰く「吹割の瀧なり」

水大に減じなば、同じ吹割の瀧を或は縱にあらはすべく或は横にあらはるべしと思はるゝ大磐石、長く數町も下につゞき、その間馬脊の如き長巖川を横斷せむとするものありて、終に大瀧と稱する瀑布となり、その下は水ゆるく流る、兩岸の絶壁一曲せるが爲めに千歳橋までは見えず。吹割の瀧より下へかけて、對岸に巨巖直立し長さ數十間に及ぶ。曰く障子巖也。上流に島あり松之に生ず。曰く浮島也。浮島の右には千人隱と稱する巖窟あり。左には女夫巖あり。吹割の左岸に屹立する藤山の上より對岸を見るに、障子巖上、一山更に全く骨をあらはして高く天を衝き、紅

葉之に点綴す。…………單に瀑の奇あるのみに非ず。このあたりより千歳橋までの溪流のさま、優にこれ天下の絕景也…………」

四　圓覺の瀧

上毛第一の大瀑圓覺の瀧は追貝より三里。片品川の支流追貝川の上流にある。溪谷は甚だ狹く、路はその右岸に沿ひ川に離れまた川に接する、接する所に源公平と云ふ小部落がある。源公平の手前數町の處にて川を渡り少しく下れば、高さ三丈の岩塚の瀧がある。下つて叉川を越えて行けば猪の鼻の瀧がある。猪の鼻に似た岩を中にして二條の水分れてまた合ふ。高さ二三丈。

源公平より上流は巉巖四邊に直立して登るに頗る苦痛である、兩岸屈曲して肩を摩するところ、三條の瀧は電光形に上下連つて落下し、高さ各十尺、合せて三十尺の大瀧である。是を圓覺の瀧と云ふ、更に上流五六町の間に三個の大瀧がある。最も上なるもの高さ二十丈ほど二段となつて直下する。是等を總稱して大瀧と云ふである。

第五章　碓氷川

一　總説

碓氷川は碓氷嶺に源を發し、霧積九十九入山等の諸川を合せて東流し、豐岡村大字下豐岡村に至つて烏川に注ぐ、流程十里。

川そのものに他の河川の如き特色を賦與されて居らぬが、川を遡るに從つて妙義の奇峯は愈々眼に明らかさなつて、刻々に變化する山形は怪益々怪となる。又淺間山は之に近づくに從つてその美その光その威その力の凡てを啓示するを惜まない。妙義を望み淺間を仰ぎ得るはこの川に沿ふて旅行する者に取つて、最大の愉樂さなつてゐる。

高崎を起點さする信越線は川に沿ふて走り、遂に碓氷峠を越えて信濃に入る。妙義山に登るには松井田驛に下車すべく、碓氷の紅葉を探るには橫川驛若しくは熊の平驛に下車して上るか、或は輕井澤驛迄で至つて下るべく、淺間登山を試むるには輕井澤驛か沓掛驛に下車するが宜い。

二　峠の下へ

高崎驛より六哩五鎖にして安中驛がある。町は碓氷川の北岸一帶の丘陵上にあり翠綠に點々白堊を綴れるまた一の眺めである。町の東三十町ばかり板鼻町の北西なる鷹の巣城址の山上に立てば、絕壁峭立する下、碓氷川は九十九川を合せて愈々大となる。淺間の雄、妙義の奇、連峯波濤の如くに起伏し、流域の平原眼下に展開して眺望絕佳である、城址は武田信玄の臣依田六郎の據りしもの。又山頂に大物主命を祀つた鷹の巣神社がある。

列車は川を右に見て溪谷の奧深く突入する。溪谷を壓して碓氷嶺聳え、淺間の火

山は更に高く群山に號令するが如き威嚴を示してゐる。その噴煙の活動は如何に四邊の光景を支配し、或は陰鬱ならしめ或は光榮あらしめるであらうか、朝夕にまた四季に、是等の連峯の色彩の變化は、如何に遊人の眼を樂しましめるであらうか。

安中の次驛磯部には鑛泉がある。停車場の北方三四町北に碓氷の清流を控えてゐる。炭酸性の冷泉にして胃病に効ありと。この驛に近づくに從つて妙義はその白雲金洞金鷄の三峯を漸く明らかに望ましめ、川を越え松井田驛に上れば、呼べば應へんとする風情にて、天を割かんとするが如き劍戟は益々尖鋭となつて來る。

溪谷は峠に近づくに從つて愈々深く俯さば千仭、川面に日光も射さぬか暗影微動して窈黑、眼もくらまんとする。瑞西の山中に旅するに似た心持を覺えるのである横川驛よりは愈々アプト式軌道となり、峠の隧道に入る。隧道の數廿六個、その絕間々々には碓氷川の溪澗巨口を開き他に求め難き絕景である。

第六章 鏑川

一 總說

鏑川は北甘樂郡尾澤村大字星尾村及び熊倉村砥山より發する南牧川と、同郡西牧村大字西野牧村より發する西牧川とが、下仁田町の西に於て合するもの、十里餘を東に流れて高田川雄川大澤川鮎川等の水を入れ、多野郡八幡村大字阿久津に於て烏川に注ぐ。

溪谷の咽喉を扼するものに富岡町あり、溪流の趣は此處より始まる。峽中の都會に下仁田町あり、是れより深くしては幽玄奇嶂である。即ち靈域黑瀧山不動寺は南牧川を遡つて達する。

高崎市より富岡まで四町二十八町、下仁田まで八里八町、高崎より下仁田迄で上